
SINRA

空想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S I N R A

【Nコード】

N 4 5 8 4 G

【作者名】

空想

【あらすじ】

魔法使いや戦士、妖怪、悪霊などのすべてが存在する森羅という島。ある日普通の高校生の勇人の部屋に現れたのは死神！？ではなく泥棒。その泥棒は『俺はガーディアンだ』と言う。それから勇人の非日常生活は、さらに悪化する！コミカル現代ファンタジーです。

――すべては森羅から

「なんでこうなるんだあー！」

夜の街を制服姿で森羅^{しんら}勇人は全速力で逃げていた。なぜなら、後から謎の怪物らしきものが追いかけてくるからである。

すいません、通してください！ と、勇人は人を掻き分けるようにして、その足を止めようとはしない。掻き分けられた人々の中には、何の騒ぎだ？ と後ろを振り返り、その怪物を見て驚く者、ひどい者は腰が抜けて尻餅をつく者もいたが、一部の人間はあたかもその怪物がいらないかのように振舞う者達がいた。その者たちは別に現実逃避をしているというわけではない。

単に、その怪物が『見えない』のだ。

「俺もうつかりしてて……」

勇人は隣で一緒に逃げている少年を見る。

その少年は、身長175cmと、高校1年生にしては中々の長身を誇る勇人よりも大きく、ツンツンとした髪と、何を考えているのかわからない無表情が特徴である。

「何だよ『10回』までつて！ しかもそれを忘れるかぁ、普通！？」

勇人は走りながら怒鳴るが、その効果はなく、その少年はポカーンと無表情で走ることに専念している。

勇人は呆れてため息を一つ。そして、後ろを向き、その怪物を再確認。

首がない。

さらにその首は、赤ちゃんでも抱いているかのように大事に腕の

中で眠っている。

まあ、誰がどう見たって『お化け』ということに間違いはない。

彼らはもう既に5km近く走っているところだった。

少なくとも勇人は体力には自信があった。

しかしながら、競争相手は幽霊なのだ。もちろん、体力などあるはずがない。このままでは確実に幽霊に捕まってしまう。

さらに勇人には追い討ちとも言うべきハンデがあった。

この10日間あった秋休みの総睡眠時間が10時間にも満たないということである。夏休みと違って宿題もないし、中学生でもないのでやりたい放題。つまりは、『遊びまくった』ということだ。その遊びのために睡眠時間を費やし、秋休み最後の日(今日)はゆっくり1日中眠って過ごして、秋休みの疲れを癒そうと計画していたのである。が、その計画はこの隣で一緒に走る少年によって、ことごとく破壊されたのだった。

結果、今の勇人は常人よりは短気になっているし、体力上限も少ないのだった。

「おいっ、どうにかできないのか？」

「……カートリッジがあればなんとかなるけどな」

その少年は真正面を見たままで、勇人に目を合わせよう、などという気はまったくくない。

「それで、そのカートリッジってのはどこにあるんだあ？」

「お前の家」

終わった……。

勇人は心中でそう叫ぶ。

こうなった原因は、勇人が幽霊を捕まえようと、街外れの森に向かったのだが、カメラが使えなくなってしまったため、こうなってしまった——と言われてもさっぱり意味がわからないと思うがそういうことなのである。

勇人たちは幽霊を撒こうと、路地に入ろうとしたその時、

「「痛っ」」

丁度曲がり角で、勇人は少女とぶつかってしまった。

「わりい、わりい」

と、それだけ少女に謝って先を急ぐ。

突然のことで容姿^{ようし}まではわからなかったが、今はそんなこと考えている暇は

『ぎゃあああああゝゝゝゝ！』

後ろから女性らしからぬみつともない叫び声が響き渡ってきた。だいたい予想はつく。勇人を追ってきた幽霊を見て、驚き腰を抜かしたのであろう。

だが、その叫び声は不思議なことにどんどん音量を増していく。

どれだけの音量なんだ？ と後ろ振り返ってみると、

「な、何なのよおおゝゝゝ！ これえゝゝゝ！」

「なっ！」

なぜかその少女は叫びながら勇人たちと一緒に逃げているのである。

まず、意味がわからない。少女は追いかけていないのだから、わざわざ一緒に逃げる必要はまったくもって、ない。

「なんであんたまで逃げてんだよお！？」

「そ、そんなの知らないわよおおゝゝゝ！」

まったくこの街は……。

勇人はいつもながらこの街に、この街の住民や文化に呆れてしま

ここは森羅しんらと呼ばれる島。

位置的には、東京都と沖縄県、そして日本最南端の島、沖ノ鳥島を結んで出来る三角形の中心。位置的に言えばとても田舎に見られるかもしれないが、実は東京並みの、或いはそれ以上に都会なのだ。しかしながら、この住民は東京を見たことがないどころか、この森羅から出たことがない。というよりは出られないのである。

この森羅という島は、周りが山々で覆われて、島を隠すような形状をしている。だから、この島から出ることも、入ることもできない。空からいけば話は別だが、そんなことをすれば、この森羅の法律で厳しく罰せられることになる。

それはこの森羅という島の驚くべき秘密にあった。

『魔法使い』が存在するのだ。

魔法使いだけではない。戦士やら盗賊やら、錬金術師、妖怪、悪霊、神。

まるでRPGに出てきそうな職業ジョブが存在する『伝説の原点』なのです、はい。

それだけに、個性が強い人間が揃ってはいるが、勇人のような普通の人間もいる。というか、そっちの方が多い。そういうジョブを持ち合わせている者など、この人口13万人の中で極わずか。

このことがここ以外でバレたらどうなるか、ということぐらい誰にでもわかる。それで、この場所は出入りが禁止された『幻の島』ということだ。

「ハア……ハア……もう……むりい、限界っ」

さすがに体力の限界なのか、少女はもう走るといふスピードを失いかけていた。それは少女だけではない。勇人もそうである。少年はそれほどでもなかったが。

彼らはもう既に、人気ひとけのない場所まで逃げていた。

そんなことお構いなく幽霊さんはこちらへ向かって追いかけてくる。

「なああ？ あんた……… できないのかあ？」

総走行距離 8 km の疲労と睡眠不足に耐えながらも、最後の希望として少女に助けを求めてみる。

「……… え？」

どうやら、応答する体力もないらしい。

ん？ 改めて少女をよく見てみると、半袖のブラウスに赤い生地に黒のチェック柄のプリーツスカート。ブラウスの右袖には校章が刺繍ししゅうされている。確かあの校章は、この森羅でも 3 本の指に入るエリート校、森羅女学院の校章。

「なあ？ あんたそれ、森羅女学院の校章だろ？」

少女は自分のブラウスの校章を見て、

「え？ あ、ああ、そ、そうだけど？」

「だったら、なんらかの『力』を持ってるんだろ？ それでどうにかできないのか？」

すると少女は突然、勇人を睨みつけて、

「……… まさか、あんた私が誰か知らないとか言ったりするわけ？」

？？ どうやらこのお方は、自分かたが有名人とでもほざくつもりらしい。

「知らないけど………。それがどうかしましたか？」

勇人はご丁寧に応答してみる。

「なあ？」

突然少年が勇人と少女の間に指をさして話しの腰を折る。

「そんな余裕、あるのか？」

その平然な顔で見つめる先の方に目をやると、約 10 m 先に例の幽霊がこちらへ向かってきていた。

「まずいつ！」

当然ながら、彼らには（少年はどうかはわからないが）もう 10

0 mでも逃げるなどという体力は既に残っていない。まさに絶体絶命に近い状態であった。

「うつ……」

突然勇人は、凄まじい目眩めまいに襲われた。

意識が遠のいていく。

過度の睡眠不足に加え、8 kmを逃亡した疲労が今頃になってドンツからだと身体にダメージを与えたのだった。

身体が勝手に地面へ吸い寄せられていく。

はあゝ、こんなときに限って……、ついてねえゝ。

倒れる間際まぎわに少年の顔を見て、

（元はと言えば、こいつのせいだって言うのに。なんで俺がこんな目に……、）

10月19日午後10時。

森羅勇人は寮前の車道で倒れました。

——すべては森羅から（後書き）

読んでくれてありがとうございます^ ^
誤字脱字などがあればぜひご報告ください
よろしく願います！

I 非日常生活は悪化する

勇人があんな目に遭ってしまったのは、秋休み最終日、つまり今日の朝の出来事が原因だった。

時刻は午前5時。

昨日つけた覚えのないテレビの音で起きた勇人は、目の前に光景にあらんとする。

部屋が荒らされていたのだ。

「ッ……。ど、泥棒でも入ったのか……。!?」

その光景で一気に目が覚めた勇人は辺りをキョロキョロと見回し、現状を確認する。

昨日つけた覚えのない、部屋の右端にあるテレビがなぜかついてはいるが、たぶん自分が夜中寝ぼけていて、誤ってつけたと前向きに置き換え、目の前にあるクローゼットが開いていて、その中の自分の私服が散らかっているのも、寝ぼけて誤って散らかしたと前向きに置き換え、ベットから見える、玄関へと続く一直線に伸びる廊下の途中にある狭い台所も、なにやら荒らされた形跡があるが、夜中自分がつまみ食いしたと置き換え……。

前向きに考えるのもそろそろ辛くなってきた、と思う勇人の唯一の救いになったのは、ベランダ。

鍵も閉まっているし、誰かが入った形跡もない。

勇人は起き上がって、廊下から玄関を覗いてみると、こちらも鍵も閉まっただけで、誰かが入った形跡もない。

さらに念には念を入れ、玄関から見て、すぐの左側の部屋を確認してみる。

トイレもバスも使われた形跡0。

「やっぱ、寝ぼけだったのか」

そう自分で言ったあと、俺ってどんだけ寝相悪いんだ……、と勝手に落ち込みモードに入る。

そしてドアも仕切りもない自分の部屋に戻ったとき、ある一箇所だけ調べていないことに気がつく。

それは、『ロフト』だった。

「ま、まさか……」

恐る恐る、クローゼットの上のロフトを見上げると……

『スピー……スピー』

黒いローブに身を包んだ人間(?)がロフトから上半身を出して寝ていた。

……。

……??

……!?

「し、死神……!？」

この島が何でも存在するからと言って、勇人は死神様と暮らすなどというデンジャラスな真似はしない。だいたい、ここは1人1部屋が基本の学生寮なのだ。勇人はどこの誰とも一緒に住んではいない。

上半身の長さからして、身長は結構ある。だけど、顔はまだ幼いことから総合して、15歳から18歳程度だろうと、どうでもいい予想を立ててみる。

さて、これで『泥棒がいない』という、勇人のプラスな思考は敗れた。

況してはそれ以上に悪い、死の宣告を告げる死神様だったとは、夢にも思わない。

いや、まだコイツが死神と決まったわけではない。単に、自分の

身をなるべく目立たせないようにするために黒いローブを羽織っているかもしれないし、はたまた、この方は魔法使いで、時空魔法である『テレポーション』に失敗して……いやいやそれはない——とここまで考えて、思考方向を一転させる。

森羅に魔法使いは存在するが、「あ！ アナタは黒いローブを着けているから、黒魔導師だねっ」というRPG的な会話源はこの森羅愚か、この世界中どこにも存在しない2次元会話だと勇人は予想する。

「やつぱ、泥棒か……」

勇人は、『死神説』を捻じ伏せて、無理やり前向きな方向へ思考を回転させる。

我ながら、この程度で然程驚かないのが怖い。この程度のこと
は日常茶飯事なので大体のことでは驚かない、と勇人は自分の『慣
れ』というやつに呆れる。

さて、問題はこれからどうするかということだ。

警察を呼ぶ——だけど、騒ぎは起こしたくない、というのが勇人
の本音。

もしかしたら、本当に空間移動に失敗した哀れな魔法使いという
可能性もあるし、その手の超能力者という可能性も十分ありえる。
そつだとしたら、何か可哀想だ。

勇人はその怪しい少年に声を掛けようとする……が。

「……」

なんて話しかけていいのかわからない。

自分の部屋で見ず知らずの他人が寝ているという状況で、何と言
って起こす？

「あ、あのー、その君？」

我ながら、自分のキャラ設定を誤ったと感じたが、その一言で偶
然にも目を開けたので、とりあえずこのキャラで話を突き通すこと

にする。

「……。ん？」

その少年は軽く目を半分開けて、パチパチと何回も瞬きをする。
その少年は勇人の存在に気づくと、

「お前、ここの住民か？」

……。

勇人は言葉の意味がイマイチ理解できていなかった。

思わず後ろへ数歩下がると、部屋のど真ん中にあるちゃぶ台に、
踵^{かかと}を軽くぶつける。

「お前の名前は森羅勇人か？」

この子は起きてそうそう何を言い出すんだ？ と、自分の名前を
どうして知ってるんだ！？ という疑問を忘れて数歩前へ出る。

「……えつと、どちら様？」

勇人はまだこのキャラを突き通すつもりだ。

すると少年は、逆さまになった自分の上半身を直す素振りも見せ
ずに、無表情で、

『ガーディアン』

???「I can't speaking English（私は英語を話すことができません）」
しかわからない勇人には、その
ガーディアンという言葉の意味が理解できなかった。

「は、はい？」

そろそろこのキャラに苛立ちを覚えてきた勇人は、この少年にキ
レそうな気持ちをぐっと抑えて聞きなおしてみる。

「ガーディアン」

……。

再確認してもやはり日本語ではない。

「出来れば、日本語でお願いしたいんですけど……」

これが最後、と決心してこのキャラで再度この少年に勝負を挑む。

「守護霊」

「……しゅごれい？」

確かに日本語であった。

はじめは同じように理解できなかったが、頭を回転させて言葉を解析してみる。

『守護』＝守る。『霊』＝少なくとも人間ではない。

自分の頭の中にある辞書を引っ張って、言葉の意味を調べる。

ここで初めて、勇人に驚きと恐怖が襲い掛かる。

「しゅ、守護霊！！？？」

守護『霊』ということは、この少年では人間ではなく幽霊。さすがの勇人も、このような経験はしたことがない。朝目が覚めると、ロフトの上に幽霊が寝ていたなんて……。

「いや、ち、違うなっ。たぶんそれは、泥棒であるお前が俺をだますための言い訳だろ！」

あのキャラは崩壊し、元のプラス思考の自分に変更する。

もはや、プラス思考と言えるのか？ という台詞だが、その守護霊は、

「やっぱり信じてないんだ……」

無表情ですね。

「信じるわけないだろうがあ！」

勇人はロフトの上に向かって、獣のように吠える。

「それより、ここから下ろしてくれないか？」

勇人は呆れて、視線を散らかった自分の私服に向けて、
「守護霊なんだろう？ だったら、そんなところから飛び降りるくらい、怖くないだろ……」

なんか幽霊と話していると考えると、複雑な気持ちに襲われた。
それよりも勇人は、どうやってはしごもないのにあそこまで上が

つたんだ？ という疑問が浮上する。だが、この疑問は次の守護霊の言葉によつて掻き消されてしまう。

「はあく、それ、見ず知らずの困っている幽霊に言う台詞かよ……」
その少年は生意気にも、逆さまの状態で勇人を睨みつける。

その言葉と態度で、勇人の中の何かがブチンツ！ と切れた。

「やつぱりガーディアンじゃないんだろがぁ！！ 泥棒なんだろ！ 泥棒と言え！ 私は泥棒ですと言えば、警察には通報しないでやるからっ」

「じゃあ、証明すればいいのか？」
「なっ……？」

その言葉に勇人は冷静さを取り戻す。と、同時に恐怖が襲い掛かってくる。

証明ということは、呪うとか、魂を抜くとか言う『オカルト』をやるうって言うんじゃないだろうかと、心配でならない。

「じゃあ、やるぞ」

仕方ないからやってやるんだぞ、とでも言うような言い草で言葉を放ったあと、その守護霊は突然炎に身を包まれた。その迫力に圧倒され、勇人はそのまま床に座り込んでしまう。

そして守護霊は赤い狼へと変貌した。

「どうだ？ これが普通の人間にできるか？」

獣になったせいか、余計に表情が読み取りにくくなったが、声からして誇らしげに思っているのは間違いだろ。だが、勇人は起き上がりながら、

「——で、できるぞ」

何回も言うがこの程度で驚くような勇人ではない。さっきのはただ、その迫力に反射的に驚いただけであつて、『感動』という驚きではなかった。

「この街には、変身なんて技スキルを使う奴はいくらでもいる。魔法による変身。超能力による変身。遺伝子レベルの変身。だいたい、その

炎も偽者なんだろう？」

変身には様々な種類があるが、結局は姿形を変えるだけであり、身体から炎やら冷氣やらを出す、霊獣になる、というRPGの世界ではない——ということを勇人は言いたいのだった。

そう話すと、守護霊は首を傾げ

「あ、やばい。落ちそう」

「はあ?!」

首を傾げたせいもあるが、獣変身したことによってバランスが崩れたのだ。

この炎が偽者ならば、被害は少なくて済むが、もし本物だとしたら？

「おいおい嘘だろ!？」

ボタンツ。と守護霊が落下したあと、パチパチツとその落下した守護霊の下から不吉な音が鳴る。

「……マジ……かよ……」

勇人はその状況を信じたくないというでも言うように、両目を両手で塞ぐ。

パチツ……ボォー!

しかし、さらに不吉な音が勇人の耳に襲い掛かってくる。思わず指の隙間からその光景を確かめるように覗く。

私服が見事に全焼していた。

そのことから、あの炎が本物だったという絶望と、この少年が本当に守護霊ガーディアンだったという悔しさの意味を込めて、

II 守護霊は死を宣告する

「腹減った」

「……」

さてさて、今現在森羅勇人は物凄く不機嫌だった。

私服を全焼されたが、運良くも明日の学校に備えて、洗濯機に制服の上下が揃っていたのでそれに着替え、その『本物』の守護霊さんの服を改めて見たとき、さすがにこの街でもその黒いローブはないだろ……、と思ったので、これを着ろっ、と命令してそいつに制服まで貸してやったのである。

しかも、人の家に堂々と現れたあげく、飯をくれとはどういう了見^{うけん}だあ？ と、勇人のストレスは募^{つもの}る一方であった。

「それより……、なんであんなところにいたのかを説明して欲しいなあ？」

勇人は無表情の守護霊につこり笑顔で優しく言ってみる。言うことを聞かない5歳児を説得するかのごとく。

「それを話すには腹をいっぱいにしないと話せないんだ」

「……」

ムカつきすぎて絶句してしまう。

「お、おい teme ー いい加減にしろよ？ テレビの斜め左上にあるもの見えるか？」

さっきの表情を崩さずに言っているためか、口の辺りが少々ゆがんでいる。

ベットの上に座っている守護霊はすぐ先にあるテレビ画面の斜め左上を見ている。

5時45分。

「この意味、わかるか？ オイ」

「……。時間」

「……そうだよ。確かに時間なんだけどね、これは。俺、昨日寝たの2時なわけだよ、午前。俺……今日の起床時間は最低でも午後2時って決めたわけね。それで俺の秋休みの疲労はほぼ完全に回復するはずだったわけだ……」

つまり、秋休みは遊びまくって、殺人的睡眠時間を補うために今日はゆっくり休んで明日に備えよう、という計画がお前のせいで台無しになったんだぞ、と言いたいのである。それを理解したのかしてないのかわからないが、守護霊はそれを聞いて真顔で、

「それがどうした？」

この言葉で彼のストレス値は爆発寸前になった。しかし、それをグツと抑えて、

「ッ……。じゃあさ、君は夜中に起きて、泥棒がいるとわかっててそのまま寝ます？」

守護霊は首を傾げた。

「さつきから泥棒泥棒って言ってるけど……。泥棒ってなんだ？」

あれあれ？　もしかしたらこの方は日本人ではないのかな？

勇人はポカーンと絶句……。というよりは思考停止状態になってしまった。

今までの会話はなんだったんだ……。こいつと話をしていた俺がバカみたいじゃないか……。と半絶望状態に突入。

「それより飯を食わせてもらえれば、お前にすべてを話すけどな」
さつきからずっと無表情の守護霊の目を見て、何かを決心したように床から立ち上がる。

「はあ。何か食わしたら、帰るんだな？」

守護霊は首を横に振って、わずかに笑みを浮かべながら、

「帰りはしないが、喋りはするぞっ」

勇人はその言葉を無視して台所へ向かう。
とりあえず、守護霊に食事らしきものを与えなければ話が進まない。

台所は廊下にあるので、冷蔵庫を開けただけで廊下はすでに通行止め状態になってしまっただけで狭かった。

「えーっと、……あれ？ 何もねえな……」

冷蔵庫の中はほぼ空だった。

この秋休み中はずっと外食だったから、買い物なんてする必要性がなかったためだ。

「ん？」

奥に何か箱が一つぽつんと立っている。

それを取って、品名を確認すると、

「ホイップクリーム……」

補足として、『キャッチコピー 甘さ抜群！ 糖分2倍！』などという、食べると不健康になりそうな宣伝文句が表示されている。

どうせ『泥棒』という単語もわからない奴だ。ホイップクリームを食べさせても何の違和感もないだろう。

心の中で悪魔勇人が囁く。

「は、はいっ、どうぞ！」

台所から戻ってきた勇人は詐欺師のような笑みを浮かべながら、皿いっぱい盛りにつけた白いものをテーブルの上に乗せる。

「おおー！」

守護霊は今までにない笑みを浮かべて、目をキラキラと輝かせる。ここまで喜ばれると、胸の辺りがジクジクするが、満足すればいいのだ。満足すれば。それで帰ってくれば、なおさらいい。

守護霊は皿に添えてあったスプーンを手にとって、

「頂きっ」

ガツガツと猛スピードで皿の上の白くてフワフワなものを平らげていく。

その光景に勇人は圧倒され、ただ見ているだけだった。

そして1分も経たないうちに、

「ごちそう様♪」

「あッ……」

その豪快な食べっぷりに勇人も驚きを隠せない。

予想としては、まずいつ、だの、甘いつ、だのの文句を言っと思っていたのだ。

「ごちそうしてくれた礼として、いいことを教えてやる」

「……。え？」

まだ驚いてぼーっとしていた勇人は、守護霊の言葉にハッとなって意識を戻す。

「お前、死ぬぞ♪」

「……、」

……。

面白いほどに勇人の意識はきれいに飛んだ。

III 警告は脅し

人間とはよく出来たもので、あまりに自分の都合の悪いことが起きると『気絶』という最終の現実逃避を行うらしい。テレビの時刻は6時を指していたことから、勇人は約5分程度気絶をしていたようである。

守護霊と言えば、無表情で無邪気(?)にもベツトに座り跳ねていた。心配する様子もなく、こちらをただ見つめていることが、何とも腹立たしい。

「――俺が死ぬ……と、突然言われても困るんだけど……？」

見ず知らずの他人に、死ぬよ？ とか言われても、喧嘩売ってんのお？ としか思わないが、状況が違う。相手は自分が守護霊とかガーディアン言って、勇人の私服を全焼させた奴なのだ。守護霊とは言っても、守護霊という名の死神だってあり得る。そんな奴をこのまま部屋から追い出すわけにもいかない。

「じゃあ何から話して欲しいんだ？」

「ん……、そう言われてもなあ……、」

「俺の名は神守裕かみもりひろし」

なぜかいきなり自己紹介が始まる。そのあまりの突然さに、勇人は初め何のことを言っているのかわからなかった。だが、すぐに脳が『名前』と理解した。

「かみもり……裕？」

勇人は思う。普通の名前？ と。それに『泥棒』という言葉の意味がわからないから、日本人じゃないかと思っていたら、裕というモロ日本人の名前……。勇人は余計に混乱してきた。

「……、守護霊だったら、なんかもっと、エルフとか、ゴーストとか、ファントムとかいう名前じゃないの……？」

「?? ファントムならわかるが、その他のは何語だ?」

「どうやら、この守護霊さんも勇人と同じ、I c a n、t E n
g l i s h の種族らしい。」

「とりあえず、相手が名乗ったので自分も名乗り返してみる。」

「まあいいや。俺の名前は、森羅勇人……、——?」

「勇人はここにきてやつと気づく。」

『お前の名前は森羅勇人か?』

「なぜ初対面の彼が自分の名前を知っているのか……。」

「……。ああああああ!!!!」

突然、守護霊こと裕が叫び声を上げる。

「何事か、と勇人も思考を一時中断して、裕の方に視線を戻す。」

「お前が『勇人』か!!」

「い、今頃!?

と、心の中で突っ込みを入れたりする。

「するといきなりベットから降りてこちらへ近づき、勇人の手を取
って、

「どうもどうも」 俺は今日からアンタの守護霊ガーディアンになった裕だ。よ
ろしく」

「少しイタイ子なのかな?

「やや本気で裕を心配な眼差しで見る。」

「いや、その以前に『アンタの守護霊』という部分が引っ掛かる。」

「? 俺の……、ガーディアン?」

「そ。俺は霊界から派遣されたアンタのガーディアン」

「え……。少々理解しかねるんですけど……？」

「ハヤトは放っておけば死ぬんだ」だから俺が助けに来た」

どうもこの裕という守護霊は『死ぬ』という単語を楽しそうに言う癖があるらしい。

「し、死ぬって……。誰に殺されるんだよ」

「悪霊」

「あくりよう？ 悪霊ってあの、幽霊だろ？」

「そう。悪霊がはやとを殺す前に、こっちから捕まえて身を守ってもらう」

「守ってもらって、お前が俺を護るじゃないのか？」

「いやあ。お前が自分で自分の身を守るんだ」

「はあ……」

そんなこと言われてもなあ……。

確かにこの島には悪霊が存在する。するが、勇人は見たことがない。故に半信半疑なのである。

悪霊や、神と言った類は、見える人と、見えない人がいる。なので、信じる者と、信じない者で分かれるという少し厄介な現状にある。

しかし、この目の前にいる裕が本当に守護霊ならば、その存在を認めざるおえない。

「もしかして、まだ俺がガーディアンって信じてないのか？」

「うっ……」

そう。裕の言うように、正直のところ勇人はまだ守護霊という存在を完全に認めたわけではない。例え本物の守護霊だとしても、『霊』などというオカルトの世界に入り込むことはなるべくは避けたい。

「わかったっ……」

裕はそう言って立ち上がり、ちやぶ台の横にビシッと気をつける。

ハッ！ と突然、勢いよくちやぶ台に右手を叩きつけた。

「!?」

ちやぶ台に黒字の魔法陣らしきものが現れ、次第にちやぶ台を黒で塗りつぶしていく。

ポンっ。

「……」

勇人が瞬きをした瞬間に、ちやぶ台はキレイさっぱりなくなっていた。その代わりに白い箱がぼつんと佇たたずんでいる。

勇人は白い箱よりも、ちやぶ台がどこに消えたのが気になる。

「……何してくれちゃってんの？ 召還？ 今のは召還魔法とか言う、超自然現象だったりするわけ？」

「??？ しょうかん？ まほう？ 一体何の話だ？」

なぜか勇人は1人寂しくオタクの世界へ入ったような気がした。だが、そんなことでいちいち落ち込んでられない勇人は、目の前に可愛く佇む小さい白い箱に注目する。

「こ、この白い箱は何？」

そう指差すと、

「おれのいえ」

今のは聞き間違えか？ と耳を小指でほじる。

そして今度は優しく質問する。

「もう一回聞くぞ？ これは何だ？」

「俺の家」

今度ははっきり『俺の家』と聞こえた。

「お前の……いえ？」

「そうだけど？ さっきのは、俺の家とちゃぶ台の位置を交換する『心霊術』の儀式だ」

あまりご理解できない勇人にもこれだけはわかる。『オカルト』ということには間違いない。

まあ、そんなところにつつ込んでも勇人には絶対理解できないので、裕が『マイハウス』と呼ぶこの白い箱に関してさらに追求してみる。

「それで？ このお前の家と引き換えになってしまったちゃぶ台は？」

「霊界」

……。

勇人は絶句する。この1時間でどれだけ財布がダメージを喰らったことか……。この収入源の薄い学生が、さらに秋休みで既に無計画で金を使っただけかと言うのに……。

「そ、その意味は？」

「これでハヤトは自分の身を守ってもらっぞ」

「はあ？」

意味がわからない。どうやって他人の家で身を守れというんだ？

「これはカメラなんだっ」

「……？ か、カメラ？」

裕がその白い箱を手にとると、その白い箱がカメラ状に変形した。

「あ……」

「これは、非契約霊体を吸い取る力が宿る特殊カメラだ」

「ひ、ひけいやく……なんだって？」

「非契約霊体っ。何とも契約を結んでいない幽霊とか、その物質のことだ」

例えるなら、野生の動物とか、そこらへんに落ちているコインのような、誰も所持していない物や、所有者が不明のようなものと言えはわかりやすい。

「俺は神道かながらのみちに所属しているから『守護霊』なんだ。所属していなかったただの浮遊霊だけだな」

「つまりあれか？ 俺がこのカメラで悪霊とやらの殺やられる前に、俺がこのカメラで悪霊を捕獲しろ、と？」

「まあそういうことだ」

勇人は少し考えて、

「断るっ」

少し考えたとは言ったものの、勇人は既に何を言われようと拒否することは確定していた。ただ、断ったときの、この裕という守護霊の対処法に困っただけである。

予想通り、勇人の拒絶に裕はかなり困った様子で、

「そ、それは出来ないぞ！ これは日本だけじゃなく、インドやエジプト、イギリスとも大きく関わることだ！ 断ったら俺は……契約を解除される……」

「そんな意味のわからないこと言っても無駄だ。だいたい、いきなり部屋に現れた見ず知らずの幽霊の言うことを聞くとでも思ったのか？ 人間なめんなよっ、ったく」

裕は眉を目頭に寄せて不機嫌そうに、そしてすねたように、

「あゝあ、お前のせいで世界が減びてもいいのかあ？」

「そんなこと俺の知ったことか？。だいたい、どうして俺なんだよ」とすると裕はため息をついて、

「わかった、仕方がない。」

そう言っただち上がると、勇人に思いつき顔近づけてきた。

「な、何い……？」

「殺していい？」

「……はい？」

とうとう本性を表したか！ と内心思いつつも、勇人は冗談だとその裏で思っていた。

裕は首を落とし、床の方に視線を向けて、

「知ってるかあ？ 守護^{ガーディアン}霊の別名」

突如場の空気が凍りつく。どうやら冗談というレベルではない気がしてきた。

「——ワナー」

「わ、わーなああ？」

「守護霊は『守護』するものがなければ、別の仕事をすることになるんだあー……」

そう言う裕は無表情だったが、今までとは違う、何か殺気じみたような……。

「——それが、死を宣告する『警告者^{ワナー}』……」

「お、おい！？ 何する気だっ……？」

ゾクンツ、とその殺気に勇人は数歩を後ろへ下がるが、足にテレビが当たり、行き止まり。

勇人は氷の精霊にでも抱きつかれたような全身の悪寒を覚えた。

「——その意味は『死神』。そして死神のもう一つの仕事が、」
裕が笑みを浮かべながら、瞬間的にこちらへ近づいてくる。

次の台詞の予想はできていた。
なので、

（ぎゃあああああああああ——っ！！！！）

世界一怖いホラー映画をでも見ているように内心で叫びまくる。

信じてもないキリスト教の神々たちに祈りを捧げる。

「わわわ、わかったっ。わかったから、命だけはあ……」

情けない声を出さないように努力しても、この恐怖には耐えられないようだった。

「よし、じゃあ霊狩りに行くかつ」

以外にも裕はにっこり笑って勇人の腕を掴む。

（は、はめられたぁ！？）

勇人は強制連行。

驚きのあまり抵抗もできずに霊狩りに出発した。

その時の時刻は午前6時30分。

それから倒れるまでの午後10時までの15時間30分、勇人は地獄のような時間を送るはめになった。

ⅠⅤ 幽霊に理解力はない

朝。

ガバツ、と勢いよくベットから上半身を起こし目覚める。

「……、」

勇人はしばらく考えてホツとため息を漏らす。

「なんだ……夢オチかよ……」

安堵あんどの笑みを浮かべてベットから降りようと

「おはよう」

……。

なにやら聞いた覚えのある無感情の挨拶に、勇人の身体は石化したように硬直してしまふ。

慎重に、ゆつくりと、部屋中央に視線を移動させる。

「……」

再び深い安らかな眠りに就こうかと思った。

そこには、あるはずのちゃぶ台の姿がなく、代わりにツンツンの髪の毛に、勇人の制服を着た、背の高い少年が胡坐あくらをかきながらクツキーをバリバリツ食べているのである。

「ん？ どうした？ 幽霊でも見たような顔して」

「……、」

（大丈夫……これは夢だっ、うん。絶対夢っ！ そう俺は今ドリームを見ているんだっ。ほっぺたをつねればこんな冗談はすぐに覚める！）

自己暗示を掛けたところで、ほっぺたを思いっきりつねってみる。

「……」

痛い。痛かった。故ゆえに勇人は声も出ない。ショックのあまり。

「うおおおおお——っ！！！　これは夢だつ。
夢なんだよつ、勇人君！　わかつたら目を覚ませえ——っ！！」

クローゼットの扉やら床やらに、ゴツンゴツンッとココナッツの殻でも割るような勢いで頭をぶつけまくる。

勇人は昨日の出来事をすべて夢と思っている……というよりは、そう信じたかった。

守護霊と名乗る奴が現れ、悪霊を捕獲しないと死ぬと宣告され、断るとその守護霊という名の死神に殺されるという出来事を。

「神様あり。森羅勇人16歳は、死ぬにはまだまだ若い」
床に座り込んで乙女のように嘆く。

「神ってどこの神だ？ キリストか？ ヒンドゥーか？ それとも死神か？ 個人的には、神よりも天使、またはギリシャの神に祈るのがお勧めだ」

裕は人生最大の悲劇に襲われている勇人に対して何の躊躇もなく意味不明な宗教の話を持ちかける。

（最悪だあ……）

勇人はさらに落ち込みを増し、無駄に頭を床に叩きつける。

「あとな、昨日も言ったけど、そいつは霊魂と言って、幽霊の赤ん坊みたいなものだ」

床に叩きつけられている頭が、時空が止まったかのようにピタッと動きをやめる。

(…そいつ?)

嫌な予感がした勇人は、ゆっと立ち上がってみる。

⌈
⋮
?
⌋

別に何かがいる、とかいうものでもなく、裕は無表情に勇人を見つめていた。

脅かしやがって、と安堵のため息を漏らすと、勇人は裕が自分ではなく、その頭上を見ていることに気がついた。

そーつと上を向くと、

謎の灰色の半透明物質が頭上をふわふわと飛び回っていた。

「……え？ な、何なんですか？ これは……」

既に人生のどん底を経験した勇人は、もうちょっとしたことでは驚かない。

「れいこん
霊魂」

「……」

勇人は昨日の最悪な出来事を思い出す。

裕に脅されて霊狩りに（強制）出発した勇人は、薄暗い所や森、言わば心霊スポットと呼ばれる場所に連れてこられたのだが、そこで悪霊というものを探すのに相当の時間を費やした。

そしてやっとの思いで悪霊を10体も確保した——と思ったら、『それは悪霊じゃなくて、霊魂だぞ？』と、絶対霊狩りに出発してすぐに言うべきことを、その14時間30分後の午後9時に告げられたのであった。

裕曰く、この世界には霊とは言っても様々な種類がいるらしく、その中でも霊魂というのは、魂の子供みtainなもので、人間に害を与えるような霊体ではないという。

まあ、時間は喰ったがひどい目に遭わなく良かったあ、と帰ろうとしたときに、森で偶然にも本物の悪霊と遭遇してしまったのである。

慌ててカメラをその悪霊に向けたところ、どうにもカメラが機能してくれない。

裕に聞くと、『あ、……。そういえば、カメラが使えるのは10回までだったな』と平然な顔で言われ、逃げるはめになった、というわけなのである。

それを思い出して、改めて昨日の出来事は夢ではないということ
を確信し、若干落ち込みモードに入る。

一つため息をついて、

「で？ こいつらなんで俺の周りをウロウロしてるわけ？」

「靈魂はマイナスエネルギーを好む」

なるほど、と勇人は内心納得する。

人生最大の落ち込みオーラを放つ今の勇人は、靈魂にとって居心地がいいというわけだ。

「ある靈感の強い漫画家が、これを見てあの落ち込み魂というのを
描いたらしい」

「うそつけ！」

裕が言っているのはキャラクターが落ち込んだときなどに出てく
る、青黒い縦線と汗マークのことを言っているらしい。

そこで勇人は少し疑問に思うことがある。

「靈感が強い漫画家——ということは、これが見えるということは
ある程度の靈感がなければ見えないってことなのだろうか。」

「そつだぞ」

「ッ！」 勇人は少し硬直して、「お、お前今、俺の心を読んだの
か……？」

「読んだけど……、それがどうかしたかあ？」

「どうかしたもなにも、超能力まで使えるんですか？ 守護靈とい
うのは……」

「ハヤトと俺は契約で結ばれた、言わば一心同体ってやつだ」

「だったら、俺もお前の心が読めるはずでは？」

「ハヤトにその力がなければ、それはできないんだ」
ズルイ。

裕は心が読めるくせに、勇人はそれができないなんて……。だが、

裕も常に勇人の心が読めているというわけではないようだ。恐らく自分の好きなときだけ読めるようにできるんだろう。勇人としてもそちらの方が助かる。

「シックスセンス 霊感は慣れれば使いこなせるようになる……って人間は無理か」
つまりこの先一生勇人は、読心術を身に着けることはできないというわけである。

そんなどうでもいいことはさて置き、
「っていうか、今何時だあ？」

と、ポケットから携帯を取り出し、画面をみると、

11時ぴったり。

無論、今日は秋休みと呼ぶ日付ではない。

10月20日。

れっきとした『学校の日』である。

「うう……。もはや、遅刻っていうレベルじゃねえ……」

さらに、勇人の通う学校は2学期制。つまり今日から新学期であり、始業式があり、さらに脳診断レベルチェックがある、という追い討ちを受ける。制服に着替えよう——と思ったら、すでに制服の状態だったので、あれ？ と思うと、瞬時に昨日のことが脳裏に浮かんできた。

勇人は昨日倒れたのだ。

ということはこの裕と昨日の少女が勇人を部屋まで運んでくれたのか？ と疑問に思うが、今はそれどころではない。

かばん 鞆を持って、急いで玄関へと向かう。

「おまえ、絶対この部屋から……って、そのクッキーはどこから持ってきた？」

裕の周りには……1、2、3……、5つのクッキーの箱が散らか

っていた。しかもすべて同じメーカー。勇人が見たことがないメーカー。

もちろん勇人に5箱もクッキーを買う経済力はないし、もらったというわけでもない。あの箱はこの家には存在しないはずだが、と勇人は『経済力』で何かに気づいたように、自分の制服のポケットを荒らし始めた。

「——ないっ。ないぞお……俺の財布が……」

財布、という単語を聞いて裕が何やら後ろポケットを探り始めた。「これのことか？」

そこから出来てきたのは勇人の財布……。

「……なんでお前が持ってたんの？」 勇人は少し考えて、「——まさか、そのクッキー……」

「この中に入っている紙を渡したらこれをくれたんだ」

札を『紙』と表現するということは、裕は恐らくお金の存在を知らない。つまり、誰かが教えたということになり、そいつがこの馬鹿を利用してお金を全額奪ったという可能性が予想される。

勇人は怒りを抑えて幼稚園児と接するように、

「それは誰から教えてもらったのかなあ？」

「女の人だけど？」

やっぱりか！ と内心で怒りを爆発させる。

（あの女、会ったら礼を言おうと思っていたが……、絶対殺してやるう！）

怒りの爆発が表に出てくるのを、学校に早くいかなければならない、という思考が抑える。

「おいっ！ それをこっちに投げろっ」

裕が身長に合った大きい手で財布を投げる。

勇人の顔面目掛けて。

もちろんわざとである。

「おっとっ」

見事にギリギリでキャッチに成功。

「へっ、その程度の物をこの勇人様が

ぐぼっ！

勇人が油断している隙に今度はクッキーの箱が顔面に命中。

「『それ』という曖昧な表現をするから悪い」

「うそつけ！ わかってただろ！ わざとだろ、絶対！」

裕は無表情でこっちを見ながらクッキーを鼠ねずみのように食い散らす。

勇人の怒りは爆発寸前であつたが、学校に行く、という脳の命令が再びそれを抑える。

「ったく。俺が帰ってくるまで、絶対にこの部屋から出るんじゃないぞ！」

勇人は財布を後ろポケットにしまい、玄関の戸を開けて勢いよく出て行った。

ガリガリガリッ

「あっ……。あいつカメラを忘れていったな。——届けてやるか」

……。

V その女子は突然現れ消える

「勇人くん！ あなたという人はどうして先生をこんなに困らせるのですかあ！？」

身長180cmの長身で、勇人の頭上からずかずかと説教を唱えるのは、1年3Bの副担任のデйна・エルフ・シー先生。

しかしながら、この先生に説教をされても、いまいち説得力がない、と勇人は思っていた。

身長180cm……とは言っても、頭の大きさはだいたい4頭身ぐらいの大きさなのである。つまりは身長と頭のバランスが悪い。しかも、超ロングな緑のワンピースのウエスト辺りに、リボンの付いたベルトを装着しているのだが、そのウエストの位置が頭一個分のところがあり、上半身と下半身の比率が2：10というスタイルが良いのか悪いのかという驚くべき体形なのである。

「聞いてるんですか、勇人くん！？ 先生だってもちろん怒りたくないんですよ？」

先生が勇人に顔を近づけると、また身長が5cmほど伸びた。すごい迫力である。

顔はものすごく幼く、小学1年生と言ってもいい。

「目の下にそんな大きい隈^{くま}まで作ってっ、先生は秋休みだからと言って、夜中の午前2時まで遊び騒ぐなどという猿事を許可した覚えはありません！」

さつきから先生の身長が伸び縮みしている。床まで届く長いワンピースの下には、足元どころか、『脚』というそのものが存在していない。

脚がないわけではない。ないわけではないが、それはウエストから大体頭一個分強ぐらいのところで終わっている……。

『妖精』

それが先生の正体である。

人間とも思えない体形に見えるのは、先生が浮遊しているからであり、特別脚が長いとか、突然変異した超スタイル拔群外国人というわけでもない。

実の先生の身長は100cm……あるかどうかぐらいなのである。

「先生？　なんでそのこと知ってるんですか……？」

「ばつちり！　しつかり！　くつきり！　スキャナーに映ってしましたよお！？」

「げっ！　と勇人は思わず絶句する。

「先生、恥ずかしかったんですよ……？　我が学校の生徒があんな遅くまでドンちゃん騒ぎしているのを見られて……」

「でも、先生は俺の担任でも副担任でもないし……」

そう。この先生は勇人の担任でも副担任でもない。

なのにどうして、この先生が遅刻、秋休みの夜遊びを注意するのかと言うと、勇人のクラス、1年1組は担任が存在しないのである。その他に、2年1組、3年1組も存在しない。その理由は、単に必要がないから。だから代わりに時間の空いた先生が説教をしているというわけである。

「担任でも副担任でもなくても、学校の職員には間違いはありません！　幸い、教師（私達）も生徒会忙しくてそれどころではありませんでしたけど……」

勇人だけではなく、恐らく他の学校の生徒らもこの秋休み、騒ぎまくっていたのだらう。それで、この街の治安維持組織の生徒会や先生たちも忙しくて、勇人たちまで気が回らなかったのだ。

「まあ今回は補導もされませんでしたし、授業も始業式と脳診断^{レベルチエック}だけ受けられなかったので、大目見て、補習はなしにしておきます」
勇人は安堵のため息を漏らした。

「しかし！」

「！」

「今度あんなことをして、他の学校の生徒会^{メイジャー}や先生にお世話になったとしたら、これから高校卒業までづううつと補習ですからね！」

「は、はい……」

「わかったら、とつとと解析室に行つて、脳診断^{レベルチエック}を受けてきてください。もしかしたら、先生のクラスになるかもしれないよお？」

と、先生が冗談交じりに言う。もちろん勇人としては絶対お断りだが……。

バンッ！ バンッ！

「な、何事ですかあ！？」

突然の銃声音に勇人も先生もビクツとして、辺りをキョロキョロ見回す。

「先生！」

突然空から降ってくるような女の子の声に勇人は硬直した。

その制服の上からやや短い白衣を着た女生徒は立っていた。目の前に立っていた。

上から落ちてきたわけでも、向こう側の廊下から来たわけでもなく、勇人が瞬き^{まばた}をする一瞬のうちにその女生徒は勇人の目の前に現れたのだ。

「ど、どうしたんですかあ、島尻^{しまじり}ちゃん！？」

さすがの先生もあまりの突然さに驚きを隠せないようだ。

「恒例の夫婦喧嘩が始まっちゃって、始まっちゃって、大変なんです！」

「またですかあ!？」

夫婦喧嘩？ このポニーテールの女子は何を言ってるんだあ？

と勇人が突っ込みを入れようとしたところで、

「とりあえずとりあえず、二人は私が体育館へ移動させました」

「ありがとうございます島尻ちゃん！ では先生は急いで他の先生に報告してくるので、それまで他の生徒の安全をよろしくお願いします！」

先生は水平に地面を浮遊移動しながら、職員室へと急いで向かって行った。

勇人はその会話のやりとりを理解できなかったので、詳しくこの女子に尋ねようと肩を叩いた。

「なあ――」

その時、その一瞬、その瞬間に、勇人は体育館にいた。

「――夫婦喧嘩って……え？ ええええええ!!」

勇人の叫び声は体育館中に響き渡った。

VI、ここに銃刀法などない

体育館は何やら物凄いにぎわいを見せている。

1階の方では、男子生徒と女子生徒が言い争っており、その2階では男子生徒が「大和^{やまと}！ その女に思い知らせてやれ！」と。女子生徒は「そんな馬鹿男、殺しちゃって、ライトニング！」と。異性の対立的ムードが漂っていた。

ただ、そんなことを叫んでいる人の中には、誰一人として1階へ行って応援しよう、という気を起そうとする者はいない。

1階の大和、と呼ばれる男子生徒は、腰に1m弱の刀をぶら下げており、校則は愚か、昔の日本の法律にも反している装備ではあったが、その大和の目の前にいるライトニングと呼ばれる女子生徒も、両手にピストルを装備しており、大和に負けず劣^{おと}らず法律に反していた。

「な、なんだ？ この騒ぎは……」

「森羅高校恒例の、夫婦喧嘩ですよ——って、あなたはあなたは、いつの間にそこにいたんですか!？」

今頃!？ と勇人がつつ込む間もなく、

「まさかのまさか……、私と同じ移動系の……もしくは魔術師だったりしますう？」

「あんたこそなんなんですかあ？ 人をこんなところに空間移動^{テレポート}しやがって。魔法使いかつ！」

「私は私は魔法使いではありません！ ESP。つまり超能力者ですう！ それにそれに、私はここにあなたを移動させた覚えもありません！」

「いや、あんたの肩を叩いたらこの戦場（体育館）に移動されたんですけど……」

「あゝ……。私が私が移動するときに触ったらダメじゃないですか！」

「移動するときとかわからないだろ……」

なんかこいつの喋り方イライラするかも、などと思っていた勇人の耳に、1階の方から怒鳴り声が入ってきた。

「んだとお！？ 俺様が馬鹿とでも言いたいのかつ！？」

「だって現に馬鹿だもん」

「へっ。だもん、とか可愛い子ぶってる奴に言われたくないね！」

「なっ……！ あ、あんただってそんな野暮^{やぼ}な刀ぶら提げて、かつつけてるくせにっ！ まっ、モテないけどねー」

「それお前！ あれだ……。この刀を馬鹿にするということは、俺を馬鹿にするのと同じだぞ！」

「だから、あんたを馬鹿にしてんのよ！ このバカっ！」

「んだとお！？ このど馬鹿が！！」

「何よ！ このクソど馬鹿男！！」

どっちも馬鹿……と勇人はツツコミたい。

「あなた、レベルは？」

その島尻という生徒の言葉に意識をこっちに戻された勇人は、自分がレベル1ということ言うのを少しためらった。

レベル1＝頭が悪い、という方程式がこの森羅には成り立っているからである。

「……レベル……1」

すると島尻は予想通り、「レベル1……」と呟いて、

「れ、レベル1！？」島尻はため息を一つついて、「どうしてどうして、レベル1の生徒がここにいるんですかあ！？」

「だから、お前に強制送信されたからって言ってるだろ？ 俺だっ

て早く脳診断を受けないといけねえのに……」

「うう……。とりあえずとりあえず、無力の生徒をデンジャラスゾーンに放って置くのは、この学校の生徒会メイジャーの意に反しますう！動かないでくださいね……」

島尻が勇人との距離を詰め、肩に触れようとしたその時！

バンッ！

銃弾がその間を通り過ぎ、その先の窓を粉々に粉碎した。

あと数センチでもずれていればどちらかは死んでいただろう。

そんなあまりの命の危機に二人は硬直。

そんなことも知らず、殺人未遂を犯した犯人のライティングは、
「ほら！ あんたがイラつかせるから、撃っちゃったじゃん！」
と、自分の責任を他の人に押し付ける。

（撃っちゃった、じゃねえよっ！！！ こっちはマジで死ぬところだったじゃねえか！！！！）

勇人の心中では鬼のような形相でぶち切れる。本当は面と向かって言いたいところだが、拳銃を、しかも2丁拳銃を装備している相手に向かって、そう言つと今度は確実に仕留められるという命の危機を本能的に察知したため……

バタンッ！

「へ？ ちょ、ちよつと？ 島尻さん？」

島尻は運悪く自分に差し伸べた腕に銃弾が貫通して死んだ——と医学知識のない馬鹿な勇人はそう思い込んだ。ただショックで気絶しただけなのに。

それを見た1階の大和は、

「いやいやいやつ、あれは俺のせいじゃないからな……」
どうやらここにも馬鹿がもう1人。

「あんたが私を怒らせるから悪いんでしょ！」

「お前が俺をイラつかせるから悪いんだ！」

「何よ！？」

「やるか！？ あん！？」

パチパチっ。と二人の間に火花が見えそうな雰囲気になる。

すると、死に絶望する勇人のもとに、

「ハヤト……」

最初はその呼び方に、家にいるはずの裕と勘違いして、死んだ島尻（勇人がそう思っているだけ）から意識がその声にいくが、その声の主は『女』だったのだ。しかも聞き覚えのある……。さらに、見覚えもある姿がこっちに向かって手を振ってくる。

「おはよ……って……、何で勇人がここに居んの？」

その子は死体（？）を無視して勇人に問いかける。

「……、」

勇人には目の前の死体を無視することができない。

馬鹿はただ死体を暗い顔でじっと見つめる。

「……？？ ……あ、ハヤト、もしかしてえ、死んでると思うてる？」

「……え？」

「いやだなあ、こんな簡単に人は死なないよー」

「そ、そうなの？」

勇人は急な恥ずかしさに襲われた。

恐らく今の自分の顔を鏡で見るとさらに恥ずかしくなるだろう。顔はトマトのように真っ赤かだ。

「い、いや……知ってたよ、それぐらい……。……そ、それでえ？
この騒ぎは何ごとなんだ……？」

それを紛らわすために無理に話題を変える。

「はあく。ハヤトって、ホント情報力ないねっ」その子はかなり
呆れた様子で、「1年3B恒例の、銃刀カップルの喧嘩ってところか
な？」

「か、カップル？ あの仲が悪い二人が？」

「そうよお。ほらっ、1学期に新聞に載せるって、アンケート取っ
たじゃない？ あれで、ベストカップルダントツの1位だったでし
よ？」

勇人の記憶にそのようなどうでもいい記憶は存在しない。

彼女が言っている新聞というのは、勇人が所属する新聞部のこと
である。とは言っても、勇人と彼女の二人だけなので、同好会と言
ったほうが正しいが。

「——けど、周1ペースで喧嘩……っていうよりバトルしてて、授業
どころじゃないの、うちのクラスはっ……」

「ふーん……」

勇人は『バトル』という言葉に非常に興味をそそられた。
なので、しばらくこの喧嘩とやらを見届けることにした。
倒れた島尻を放置して……。

VII 力は銃よりも速く

その瞬間、体育館は凍り付いたような静まりをみせた。

この空気。心臓を握られているような変な感じに勇人は襲われた。レベル1の勇人には体験したことのない、戦闘などというものを経験したことのない勇人でもわかる、戦場の空気。喧嘩という次元じゃない。本気で人間同士が殺し合いをしようとしているのだ。

なのに、誰一人としてここから立ち去ろうという気を起こす者はいない。

ここにいる奴ら（レベル3）は正気なのか、と勇人は思う。

隣にいる新聞部の編集長でさえも、冷静に1階にいる二人を見守っている。

勇人は空気を読んで小声で、

「おい、二人を止めないのか？」

「止めるってどうやって？」

その言葉は冷たかった。

編集長は1階で睨み合っている二人を見つめて、

「ヘタに止めたって、被害が広がるだけ。それはここにいる全員が承知していることだし、あの二人の戦闘力はこの学校でも最高クラス……。この3Bの魔法使いや能力者が止めたところで、犠牲が増える。かと言って、話し合いで納得するような二人でもないしつ、やらせとけばいいのよっ」

「……」

いつもとは違う、編集長の暗い声に勇人は絶句する。

確かに編集長の言うことには納得がいく。だけど、このままどちらか死ぬのを黙って見るというのもどうかと思った。もちろん、本当にお互いに殺せるチャンスに殺すわけでもないと思うし、況してや、恋人という関係でありながらそれはないと思うが、もしも誤って殺してしまったとすれば……。

だけど、勇人には何もできない。最初は『バトル』という言葉に、『遊び』という思考が絡んでいたが、それが『殺し合い』という現実な^{アル}ことだったとは思わなかった。

この森羅でももちろんこういうことが許されるわけでもない。

だが、まだ彼らは高校生。まだまだ未熟者だ。喧嘩もするだろう。付き合ってるんだし。

しかしこれが、この森羅での『日常』なのだ。

「始めるか……？」

「望むところよ……」

銃刀カプルの二人は、互いに距離を置き、やや腰を落とす。

その距離は約50m。

距離で言えば圧倒的に銃使いのライトニングが優勢だ。

離れた瞬間、大和の目つきが獲物を狙う虎のように鋭くなり、腰にぶら下がった刀の柄^{つか}を持ち、構える。

その姿はまるで侍^侍。

今にも居合^{いあい}で目の前の獲物を一撃で仕留める侍のようだった。

「じゃあ……、私の銃の合図で開始ねっ……」

ライトニングは鼻で笑いながら、右の銃口を上……ではなく大和に向かって向ける。

そのライトニングの動作に勇人は慌てて声を上げようとする。が、恐怖のあまり声が出ない。人が殺される、という恐怖が勇人の首を絞める。

バンッ！ と銃弾を大和の急所、心臓を数センチも外すことなく発射した。と、ほぼ同時、居合^{いあい}い斬りのごとく鞘^{さや}から刀を抜いた瞬間に。

大和の心臓に銃弾は当たるところか、体には傷一つなかった。

カラン。と銃弾が大和の手前で2つの音を立てる。

大和はさっきの場所から一歩たりとも動いてはいない。

大和は音速以上の速度で発射された、わずかに口径9mmの銃弾を斬り捨てたのだ。

目の前できれいに2等分された銃弾が転がっている。

勇人は動揺を隠せない様子で、

「おい……、今銃弾を……斬った、のかよ……！？」

「大和って、私たちのクラスではムードメーカー的存在で、まあ見てわかる通り、馬鹿って感じでしょ？　だけど、戦いの時は違う。普通では見せないような眼光で相手を見て、攻撃を見切る、最強の回避率を持つてるの」

勇人は編集長の言葉をこう理解した。

銃弾を『目で捉え、体で反応した』と。

そして大和はその斬り捨てた運動を利用して体を1回転させ直線的にライティングに襲い掛かる。

そのスピードは動物界で最も速い、チーターのようなスピード。

50m7秒台、なんてレベルじゃない。

その猛スピードで突進してくる大和に向かって、2つの銃口が鉛^{なまり}の塊を放つ。

しかし、大和はライティングがその構えを見せた瞬間に刀とその体を使って華麗に銃弾をかわしていく。

（まずいつ！　大和は3m内に近づけた時点でアウト！）

その時、ライティングの右足から火花が散った。

慌てて打ち方をやめると、右足を軽く上げて、

「ッ！」

勢いよく床を蹴った瞬間、四方八方にビリリツと電気が走り、大和を向こうへ吹き飛ばした。

もちろん、この体育館に雷が落ちた、とか言うものではなく、彼女自体が発生させた電気だ。

「電気!?!」

「篠原雷花。しのはらいいか 別名、稲妻。ライティング 彼女の攻撃と、銃弾の素早さから付けられた名前よ。彼女は電気系統でんきけいとうの超能力者の1人」

「じゃあ圧倒的にその雷花って奴の方が強いじゃないか! 幾ら凄い目を持っていても、電気のスปีドについていけるわけが……」

「それはどうかな?」

編集長は大和を見ながら、笑いながら言った。

倒れた大和に躊躇ちゆうちゆうすることなく銃口を向ける雷花。

「私よりも弱い彼氏はいらぬ。死ぬ」

雷花の左手が引き金を引く寸前、大和はその銃口てのぐちに掌を見せて、

「スロウ……」

バンッ!

ほぼ同時。

銃弾は大和まで3mという付近で時速1km(人間の歩く速度のおよそ3分の1)という速度でゆっくりと大和を目掛けて飛んでいた。

その大和の掌からは、緑色の直径2mの魔法陣が生じている。

「魔法使い!?!」

これで3度目。

勇人があまりにも知らないことが多すぎるので、編集長はそろそろ説明するのがめんどくさくなってきた。

「ってあれ? 説明してくれないの?」

「はあ……」。正確には魔術師ね。とは言っても、時空魔術しか使

えないんだけど……」

魔法と魔術の区別がわからない勇人にはさっぱり意味がわからなかったが、何よりなぜ呆れられてるのかということが特にわからない。

「だったら！」

雷花は空中へ大宙返り。その高さは2階まで数メートルというほどの高さであった。

おおおお！ と2階にいる男子生徒は狼のように吠え、雷花が空中で真つ逆さまになったとき、おつ……ああああ……、とがっかりする。

言うまでもなく、彼らの目的はスカートの中であり、それが短パンだったことにショックを受けているのであった。

今ので緊迫感が解れた^{ほぐ}体育館は、又も異性の対立が目立ってきた。

大和は体勢を立て直し、刀を持ち直すと、雷花が引き金を引く直前に刀を十字に斬り払う。

その瞬間、真つ逆さまの状態で銃声と共に放たれた銃弾は、見事なタイミングで十字によって真つ二つに分かれて、床から金属音を響かせた。

その時、大和は下を向いたままだった。

勇人はさっきの編集長の説明で、銃弾を『目で捉え、体で反応した』と理解したため、その光景に思わず絶句する。

「……お、おい……」

「何で見てもいないで銃弾を斬ったかって？」編集長は大和を見て、「私は眼光は凄いとは言ったけど、目が凄いなんで一言も言っけないよ？」

「……はい？」

引っ掛け？ と勇人は思う。

「ハヤトはたぶん洞察力が凄いとか思ってたんでしよう？ 悪いけどそれは無理。人間の目で銃弾を見切るなんて出来ないもん。仮に見切れたとしても、それに対応して身体からだがついてはいけないし」

「じゃあ、あいつの何が『最強の回避率』なんだよ……？」

「知ってた？ 大和つて、銃弾を『撃つてから』じゃなくて、『撃つ前から』なんらかの動きを見せてるでしょ？」

勇人はこれまでの大和の動きを思い出してみる。……確かに、始めのときも撃つてからではなく、ほぼ同時。しかも、『ほぼ』ということは大和が速かったという可能性もある。銃弾を避けるときも構えた瞬間に身体を動かして回避していた。つまり、大和は銃弾を見ている、というよりは、『雷花を見て』攻撃を回避しているということになる。

「——彼が凄いのは、『勘』」

「勘？」

「相手を観察して、次に相手がこう動くだろうっていう予想を立てて、それに合わせて体を先に動かして回避する、最強の勘シックスセンス。大和の一族は、そういう戦闘に優れてるから、そういう力が受け継がれてるんだと思うよ。それと努力もあるだろうし」

森羅が出来たと言われる一説がある。

それは昔、世界各国の魔法使いのような特殊な一族が、この森羅を作り発展させた、という説だ。そのため、この森羅には魔法使いや錬金術師、降霊術師、戦士と言った特殊な族種がいて言われている。

「魔法使いって、不便よねっ」

雷花が床に着地しながら嫌味つたらしく言う。

「生命体に対する魔法は全部半減しちゃうんだから。しかも、あんなのその時空魔法にいたっては、その効果は無効だしね」

やっぱり魔法使いで合ってるんじゃない？ と勇人はそれを聞いて

思う。内容は理解しかねるが……。

雷花が言いたいのは、その『スロウ』って魔法が私自体に使えたら楽勝なのになっ、という嫌味である。

空間を利用した魔法を生命体に使うのはこの森羅では禁止……ではあるが、どの道使えない。生命体に関しての空間の魔法解明はまだ出来ておらず、その魔法を発動させることなどできない。万が一、それを発動できた者が現れぬように、それに関する研究及び魔法（魔術）の発動は禁止なのである。

理由は言うまでもないが、そんなことできたら、不老不死どころか、自分の好きのようになれるし、相手を簡単に殺せるし、自分と相手の人生を変えることが容易くできてしまうからに決まっている。しかし、それを聞いて普通大和は『んだとお！？ だったらいつか俺様がテメエをヨボヨボのババアにしてやるよ！』とでも言いそうなのだが、目つきを変えずにそのまま何の反応もなく雷花に向かって襲い掛かってきた。

「そういうところが、あんたの一番好きところなのよッ！」

そう言いながらも、右足を軽く上げて地団太を踏

「なっ！」

その瞬間に床を蹴り上げて大ジャンプ。電気を予知して攻撃を避けた、のだが、

「やっぱり馬鹿ね？ 空中じゃ、身動きがとれないでしょうがッ！」

銃口を天に向けて、引き金を引いた。しかし、

そこにはもう大和の姿がなかった。

「ッ……！？」

雷花も含め、2階にいる全生徒が1階を見回して大和を探す。

「！！！」

その時！ 瞬時に背後から殺気を感じ取った雷花はとっさに持っていた銃でその攻撃を防ぐ。

その攻撃は刀。

それは刀背^{みね}ではなく、その銃は『刃』を抑えていた。

「その目といい……、私を本気で殺す気ね……大和……」
そう言いながらも、雷花は微笑んでいた。

VIII 銃は刀よりも鋭い

「……おい……、どう、なってんだ……？ あいつは……、大和つて奴は……、いつ後ろに……！？」

そういう驚きを見せるのは勇人だけではなかった。

2階にいる一部を除く全員が勇人と同じ表情になっている。

「空間加速。英名では『ヘイスト』っていう魔法の効果よ」

そう説明する編集長の顔も驚きを隠せないという感じだった。

「——時空魔法の一種で、自分じゃなく、その周りの時空間を加速されて、あたかも自分が速くなったように見せる効果があるの」

「あたかも、ってことは、実際は違う、ってことなのか？」

「ん……その質問は難しいかも……。周りの人から見れば、実際に速いんだけど、その術者は周りが遅く見えるの。だから、どっちも正しいし、どっちも間違ってるとも言えちゃう……」

2階にいる一部の人たちは、編集長のようにそういう魔法知識を知っているため驚きが半減されてしまっていた。

だが、そういう人から見ても、大和の魔法や魔術はとても高度なものだった。編集長が若干驚いているのはそのためだ。

「まっ、それぐらい時空魔法は難しいってことよっ」

「……」

勇人には編集長の言葉に応答するまでの気の余裕はなかった。

目の前で、二人の人間が互いにいつ殺されても殺してもおかしくない状況にあるのだ。そんな時にのんきに「へえ、凄いね」なんて応答はできなかった。

「ッ……。だけど、忘れた、の？」

大和の鍛え抜かれた腕力を必死に抑えながら雷花が言葉を放つ。

雷花は力一つでも緩めてしまえば、一気に切り落とされそうな恐怖に近い感覚に包まれていた。

「――私が……、『エレキテル・メーカー』ってこと、をッ！」
その瞬間、何かに気がついた大和は急いで雷花から身を引こうとするが、もう遅かった。

銃から電撃が発生して、大和を直撃した。

2階の生徒、特に女子が微かな悲鳴を上げた。

いつの間にか、男子は雷花を女子は大和に視線を注いでいたのがある。

「エレキテル・メーカーについて聞きたい？」

「え？ ……あ、ああっ……」

別にそれほど気になる言葉でもなかった、ていうよりは、目の前で起きているバトルに集中しすぎて、そこまで頭が働かなかった。

「別名『金属発電』ていうんだけどねっ、金属から電気を発生させる超能力の一種。でも、そのまま電気を利用できるわけじゃないから、威力は全然ないんだけどお……、人を軽く飛ばすくらいの衝撃ぐらいかな？ 殺すまではいらないかも」

「……」

『ちよつとハヤト聞いてるの？ 人がせっかく説明してあげてるのに！』という次の編集長の言葉は耳に入らなかった。

勇人は改めて、この森羅という世界の恐ろしさを身に感じていた。人口の半分が、人を簡単に殺せるなんらかの力を持っている。

その恐怖が今頃になって勇人にのしかかる。

軽く5 mほど吹き飛ばされた大和は刀を握り締めたまま立ち上がり、それを構え、攻撃又は防衛体制に入る。

「そろそろ決着つけなきゃねっ？」

すでに30分が経過していた。

あの妖精の先生は何をしてるんだと勇人は思う。

雷花は銃口をゆっくりと大和に向ける。

その時、雷花は笑っていた。

勝利を確信したように笑っていた。

しかし大和はまったくその鋭い表情を変える様子などなかった。ただ、一点を。

銃口ではなく、雷花を鋭い眼光で見つめる。

「死ねッ」

バンッ！ と放たれた銃弾と共に、大和は刀を一振りした。

銃弾は大和の刀によってやはり一刀両断されてしまう、はずだった。

悲鳴のような金属音が体育館全体に響き渡る。

冷たい泣き声が大和の耳を襲った。

刀は銃弾が当たったところから粉々に砕け散った。

刀と銃弾の相打ち……ではない。

刀を粉々に砕いたあと、肩に刀にでも切られたような深いかすり傷を負った。

刀が鋭さで負けたのである。

「まずいよっ！ あれじゃ次は撃られちゃう！」

隣の編集長がいきなり大声を上げる。

その言葉は2階の生徒誰もが承知しているように見えた。だけど、止めようとする者は誰もいない。

「ど、どういうことだよ！？ 刀がなくなつて、ヘイストとか言う魔法とかを使えば、銃弾なんて避けられるん、だろ……？」

「違う！ あの刀は攻撃や防衛の他にも重大な役割を担っているの！」

「??？」

刀を『斬る』物としか知識にない勇人には意味が理解できなかった。

「あの刀は『魔具』っ。あれを魔力源として魔法や魔術を行ってい

るからっ、あれがない大和は『魔法がうまく発動できない』！」
「なっ……！」

前半の台詞は専門用語が多くてよくわからなかったが、最後の言葉で大和は今、魔法が使えない、ということだけはわかった。

『す、スロウ……！』

左肩を動かさないように、右手で魔法陣を発動させようと、自分に向かっている銃口に力の限り手の平を見せる。

緑の魔法陣が一瞬の発光と共に姿を現した。が、

魔法陣はガラスが割れるように、わずか1秒で粉々に消滅してしまっただ。

「ッ！」

鋭い眼光もこの状況では驚きを隠せない。

「やっぱりっ、魔具なしでの魔術は安定性がないっ。……もう、終わりかも……」

「そんな……」

とうとう殺されてしまう。

大和が殺される画が脳裏に浮かんできた。

「やっぱり、アンタは馬鹿よっ。なんでもかんでも防ぐんじゃなくて、避けるってこともおぼえなきゃねっ」

そう言いながらも、左銃口も大和に向け、両手の銃口がまるで蛇の口のような恐怖感を漂わせた。

「死ねっ！」

ドーンッ！

「！？」

今のは誰が聞いても銃声ではない。

銃刀カップルの間に突如として現れたのは、岩で作られた3mほ

どの巨人。ここで言う『岩人形』^{ゴーレム}と呼ばれる代物。
それが銃弾から大和の身を守った。

「はーい、そこまでっ」

何やら気の抜けた女性の声が体育館に響いた。

「な、なにを考えているんですかつ、あなたは！」

そのあとから可愛らしい子供……ではなく妖精のディナ・エルフ・シー先生の声が耳が痛くなるぐらい体育館に響く。

突然の出来事に勇人はポカーンとなっている。

それはなぜか勇人だけで、隣の編集長も含め、2階にいる生徒らは驚く、とか、あ然、とか言うんじゃないくて、呆れ、という表情をしている。

やっと来たよ、先生たちっ。と呆れているが、怒っているようにも見える

「生徒を殺すつもりなんですかあ！？ 死ぬ寸前まで見物——もぐっ！」

気の抜けた女性は、その小さい口を慌てて覆^{おお}い、窒息させる勢いで自分の元へグイッと引つ張る。

「はーい、全員教室に戻ってなさーいっ」

だが、妖精の言ったことをここににいるすべての生徒は聞いていた。
『見物……！？』

全員が心の中で突っ込む。

そしてその後に全員に怒りが込み上げてくる。

（まさか、あの先生。今の戦い見物してたの？ しかも、死ぬ直前まで放っておいたの？）

勇人もあ然に加え、怒りというより疑問の方が強い、なんとも言えない感情が込み上げる。

その気が抜けた（怪しい）女教師は、ディナ先生に何かを耳打ちしたあと、ゴーレムに向かって、

『O・U・T』

謎のスペルを言った瞬間にゴーレムは崩れ落ち、一瞬の発光と共に消えて去った。

「あと、その二人、」

ここにいるほぼ全員が『後で指導室へ来なさい』とでも言うのかと思えば、

「――保健室に行きなさい」

と以外な言葉だった。

大和は傷を負っているからわかるが、雷花まで行く必要ないと勇人は思った。

「頬ほほ」

指を指された雷花はとつさに頬を触る。

べたつとした赤い液体が指に付着した。

他にも傷つけられたところがないかと体を見回す。

ふくらはぎ、腕、服にもところどころ斬り後が残っていた。

「いつの間に……」

「――お前がさっき電撃を放つ前だ」

「え？」

大和が砕け散った刀を持って立ち上がる。

「ヘイストでお前を後ろから斬りつける前に、軽く斬ってやったんだよっ」

大和は空中で消えてから雷花に斬りかかる間に、高速で斬りつけていたのだ。

後ろから斬りかかったのも、それは雷花が銃で防ぐことを承知の上で、その実力があると認めた上で斬りかかったのである。

「つまり俺は、『お前をいつでも殺せた』」

そう言う大和の目には戦っていたときのような鋭い眼光はなかった。

「だけどもあ、お前は——」静かに目を瞑^{つむ}って、

「よくも俺を本気で殺そうとしてくれたな!? おいつ!」

「なっ、何かっこつけてんのよっ! だ、だいたい! 喧嘩^{けんか}ってそういうもんでしょ!」

「俺の一族でも喧嘩で本気で殺すなんてことしなかったぞ!」

「ふんっ。あんたの一族甘いわねえ。私の家なんて毎日殺し合いよっ! 命争奪戦よ!」

何やらさつきと同じ雰囲気になってきました。

「しかも見る! この哀れなる愛刀の姿を! これ幾らすると思っ
てんだ! ゴラァ!!」

刀を指差して地団太を踏む。

「100円でしょ? 百均^{ひゃっきん}で売^おってる玩具^{おもちゃ}でしょ?」

「デメエ……もう一度言^いって見やがれ、……殺^{ころ}すぞ!」

「何回でも言^いってあげる♪ 百均の玩具。何も出来ないただの飾^しり
」

「んだとお!!……はい! もう切^きれましたっ! 俺様こと時^し
雨大和は堪忍袋^{ぐれやまと}が切^きれましたっ! この変な髪形の女を殺^{ころ}すことを
ここに宣言^{せん}しますっ!」

確かに雷花の髪型は、左前髪を垂らして左目があまり見えないよ
うな髪形だ。まあそこまでは普通範囲内。しかし、後ろ右側に髪を
束ねているんだが……、それが斜め上に向かつて、まるでワックス
でもかけたようにカチカチに尖^とがっていて見た目、鳥? という印
象を受けるので、これは常識範囲外だったのである。

「へ、へんな髪型だとお!!! 髪は女性^{ライフ}の命^{さか}よ! それにこの鶏^と
冠^{かさ}見たいのは生まれつき!! 生まれつき人の上に立つことを許さ
れた王の証なのよ!」

「うぷぷっ。そ、その曲^{まが}がった鶏冠^{けい冠}が!? お、お前の……ククク
ッ、ライフ!? 笑^わわせんじゃねえよ! あははははっ!」

爆笑。

笑いすぎてたまに、痛ててっ、と左肩を抑えるが、彼の笑いのつばに命中したらしく、痛さを堪えてまでもまだ笑っていた。

「わ、笑いすぎだっ、ゴラァ！ ……殺す！ 絶対殺す！！」

「……あいつらアホだろ？」

「あれ？ 今頃気づく？ それ」

勇人が呆れるのも当然だが、なにより、あのバカツプルに対して、『心配』とか『恐怖』を感じた自分に呆れてしまった。

しばらく二人の喧嘩は続き、先生がなぜ止めに入らないのかと思えば、ディナ先生を必死で気の抜けた先生が抑えていためということがわかった。

気絶した役に立たない生徒会が目覚め、やっと二人の喧嘩を止めることができたが、そのせいで勇人は脳診断に大きく遅れをとってしまった。

勇人は思う。

この学校から一刻も早く卒業したい、と。

IX 笑いは時として人を壊す

この街にある学校すべての時間割は学年別ではなく、クラス別で違うという変わったシステムにある。それはその生徒のレベルによってクラス分けされることによるもので、そのレベルは毎学期ごとに行われる『脳診断』レベルチェックによって決定される。基準としては、どれだけ脳が覚醒、発達しているかどうか、という点で、全体を100としたときの覚醒、発達の割合でレベルを決める。クラスの番号は、その『レベルのクラス』というわけだ。しかしながら、レベルが高い、強い、とかいうファンタジーの基準というわけでもない。レベルが高くて何の力を持たない者もいるし、レベル2でも凄い力を持つ奴もいる。ただ、レベルというのはあくまでも脳がどれだけ覚醒しているか、というもののなので、そこらへんはあまり関係ない。

しかし、レベル1に関しては例外で、レベル1はレベル1。つまり絶対には持っていないということである。レベル2で念動力サイコキネシスを使える者もいる。レベル5で何の力も持たない者もいる。が、レベル1で空間移動テレポートができるとか、肉体治癒ヒーリングを持っているということは100%ない。

それは勇人も同じ。

レベル1とは一般的な基準で、森羅の人間ではない、つまり日本やアメリカと言った人間の脳の覚醒基準なのである。見る、話す、考える、聞く、味わう、感じる、臭う、と言った人間の行動しかできない人達の仲間が勇人なのである。

勇人のような人間は世界の9割を占める。だが、ここ森羅ではおよそ5割強。だから当然、街中で力を使おうという気を起こせば、もちろん捕まるか、生徒であれば指導がくだされる。だが、勇人はそんなことには無縁だった。

だってレベル1なのだから。

何の力も持たないレベル1……。

「——の、はずだったんだけどなあ……。なぜに運命の女神は俺をこういじめるんだ……」

勇人は今現在、1年3B組の机で授業を受けていた。

「はい、ではつ、さっきの騒動でHRホームルームはなくちゃいましてので、さつさく森羅理論について勉強していきますよ？」

ディナ先生は張り切って授業を始める。

勇人がこんなことになってしまったのは脳診断レベルチェックをしたことから始まる。

あの騒動のあと、勇人は編集長に別れを告げて解析室に向かったのだが、

「レベル3」

その若干太り気味のふてぶてしい顔をしたおばさんは言う。

「……はい？ レベルう3……？ 間違ってますん？ それ」

「レベル3」

しつこいつ、とても言うように同じ声のトーンで言い返してきた。

「いやいやいや、計り間違えでは？ 俺生きてこの道16年、レベル1をやってきたんですけどお……」

「だったら、頭トンカチで叩き割って、レベル1にしてあげてもいいのよお」

「……結構です。レベル3で……」

そのおばさんはふてぶてしい表情を変えようとはしない。これが真顔なのだろうか？ 逆にそれが独特の恐怖感を漂わさせていた。

「わかったらさっさと3B組に行くー！」

「は、はい……」

というわけで、渋々このクラスに強制追放されてしまったのである。

今行っているのは森羅理論という授業で、この森羅に関することや力の使い方とか言うこの世界での『基礎』を教える時間。教科担任はなく、それぞれの担任が教えることになっている。ちなみに、これは必修科目なので取らないという生徒は誰一人としていない。なので、授業もクラス毎で行い、学校全体で授業を行う。

レベル1の生徒もこれだけはやることになっているので、勇人も多少のことは知っている——というわけでもなく、授業を聞き流している勇人には何の知識もなかった。

「——つまり！ 魔術とは術式や法則を利用した術で、魔法とは魔力を身体及び魔具から放出する術のことを言うのです！ ——って聞いているんですか大和君？」

大和は机に肘をつきながら、先生の話を書ながら聞いていた。「まったく……。別にいいんですよ？ 授業を聞かない生徒は補習ですからっ」

呆れたように黒板に向き直ってチョークを持ち直す。

「先生……」

「？」

「俺は眠ってなんかいませんーん」

変わらずその姿勢を保ったまま言い訳を始める。

「目を休めてるんです——とか言つつもりなんでしょう！ どうせっ」

「視覚的情報を無くして、聴覚的情報に集中してるんです。えらいでしょっ？」

「むう……。先生にそんな屁理屈通用しませんよ！？ だいたいあなたは魔法魔術専攻の生徒なんですよ！？ こんな基本中の基本を勉強しないでいいと思ってるんですかあ！？」

先生が何もない大和の机を指差して声量を徐々に増していく。

「俺は武術専攻の方が良かったんですよあ……」
その体勢を崩すことなくすねる。

「だからと言って、授業放棄していいわけではないんですよあ？」

「じゃあ、他の超能力専攻とか、武術専攻とかの奴らはどうなんですか？ 全員、寝てますけど？」

「へ？」

ディナ先生が辺りを見回すと驚くべくき光景が広がっていた。

クラスの半数以上が仮眠を取っていたのである。

「……ふふーん、先生がこの程度のことで取り乱すと思ったら大間違いですよお？」

「……」

「先生は知っています。怒ったって時間の無駄というぐらい知っているんですつ。そんなことをするよりは、授業をしつかり聞いている生徒に対して丁寧な授業を行い、授業をサポートする生徒には後でしつかり補習をすればいいんです！」

先生は今までの人生で学んだことをベラベラと喋る。

（先生つて何歳だ？ 見た目7歳……だよな？ 7歳の先生にそんなこと言われても全然説得力ねえ）

「はははっ」

「勇人君！？ 何がそんなにおかしいんですかあ！！??」

「——あつ……」

勇人はつい自分の考えたことが面白くて笑いを声に出してしまった。

慌てて口を抑えたがもう遅い。完璧に先生にマークされた。

「先生の顔になんかついてるんですか！？ それとも悪い妄想癖でもあるんですか!？」

「い、いや……そういうわけでは……」

「それとも……、先生の可愛らしさに思わず笑みがこぼれたとか？ 頬に手を当てて可愛い（と思っている）ポーズをとる。」

「先生つ。話はそれぐらいにして授業を再開してもらいませんか？ ぶっ！」

大和の斜め向かいに座る新聞部の編集長が言ってはいけないことを発言に勇人は思わず吹き出してしまった。

一番後ろの席で馬鹿笑いしているのは雷花だった。

「！」

先生はギロツと雷花を睨んでチヨークを手裏剣のごとく投げつけた。

「……ぐあゝっ」

放ったチヨークは見事に雷花のおでこにヒットして、死んだように椅子ごと後ろにひっくり返り気絶した。

「勇人君、今のを『チヨーク一本』って言うですよ？ この意味わかりますか？」

勇人は瞬時に理解した。

あれがチヨーク一本ということは、チヨーク千本は『死』を意味することを。

「はい、では授業を再開しますねえ？」

何事もなかったように授業を仕切りなおす。

（——何か見てはいけないものを見たような気がする……）
そう思う、クラス一同であった。

X その襲撃は見えない

結局、これからはちゃんと授業を受けてくださいね、と注意されただけで帰された。

「2時……かあ」

携帯の画面に表示された時刻を確認してポケットにしまう。

勇人は東京と変わらぬビルが建ち並ぶ道を歩いていた。

ここ森羅の街は、東京やそこの都会となんら変わりないほどの発展を遂げていた。魔法が存在するということも大きな理由であったが、何より、一般の人間と比べて脳の発達の値が違う。そのため研究者が数多く揃っており、特に情報科学においては世界1と言ってもいいほどだった。

なので、日本と変わらず携帯やパソコンも普通に存在するし、変わったところと言えば、対侵入者と防犯のために設置された『^{スキャ}解析機^{ナイ}』が一つの街に数万個ある程度である。

そんなキレイに整備された街を家に居候する守護霊の裕を考えながら歩いていた。

勇人の財布の金で、あのクッキーが何箱買ったかは知らないがそろそろ、いや、疾^とうの昔に食べ終わっただろう。ということは、今頃腹を鳴らして勇人の帰りを待っている、か、待ちきれず外に勇人を探しに行ったか。

（てか、財布の中身はいくら残ってるんだあ？）

99円……。

「……おつり、かよっ……？」

財布の中にある50円玉1枚、10円玉4枚、1円玉9枚を見て絶句する。

クッキーをありったけ買ったあとに出てきた金の残り、と勇人は

予想する。

「しかも、99円つて。あと1円で何か買えるつてのに」
泥棒のような目つきで地面をキョロキョロ見回す。

「——人生そうあまくないよなあ……」
ため息を一つついて再び歩き出す。

あの守護霊さんは何のために自分の元へ現れたのだろうか。
悪霊を退治(？)するのを断ったら、世界が減ぶつ、とかなんとか言っていたが……。

それ以前に、なぜ自分じゃないければならない、と勇人が考えたところで、頭上になんか違和感を感じた。

「なんか……いやな予感……」

顔を上に向けると、やはり、謎の灰色の半透明物質が浮遊していた。

「うう……、また靈魂つてやつか……」

こんなとこ、誰かに見られたら——なんて心配の必要はなかった。
通りすぎる人々(特に学生が多かった)は、その勇人の頭上に浮いている奇妙な物質を見ても動じない。恐らく見えていないんだと思った。が、

「アンタの頭に浮いてる変なの、何？」

不意に後ろから声を掛けてきたのは、昨日の変な少女だった。

『驚き』や『戸惑い』という感情はなく、ただ『怒り』という感情が込み上げてきた。

「——降^{ゴーストダウン}霊術師ですかあ？」

昨日のことを思い出し、勇人の怒りのパラメータは徐々に上がっていく。

「デメエー……人の金を盗んでおいてよくもまあ、そんな態度ができるよなあ……」

「はあ？ 昨日助けてやったのに、いきなり逆切れですかあ？」

なんのことかさっぱりわからない、とでも言うような態度にさらにパラメータは上昇する。

「見る！」財布を少女の目の前に差し出して、「お前のせいで、馬鹿守護霊が俺の金を全部使いやがったんだぞ！？ お前の差し金だろ！」

するとその少女は何かを思い出したように、

「ああ、あれね。アンタのダチが、落ちている財布を拾って、この紙はなんだあ？ とか聞くから、『金』と教えただけよ」

「いいや、違うな。だとしたら計算が合わない。俺の財布には2千円が入っていた。クッキー1箱大体300円と計算して、300×5＝1500円！ 消費税とかがついたとしても、残りは400円弱は残っているはずだ！」

「か、買ったクッキーの数は5個じゃなくて、6個だったのよ！」

勇人は人差し指を立てて横に振りながら、

「NON、NON、6個だとすれば、残高は消費税込みだとしても100円を上回ることでなり、俺はこの帰り道に何かお菓子1個でも買うことができたのだよ？」

若干欧米混じりの勇人は、小学生レベルの計算は得意であった。

「よって、テメエが何か320円以上の買い物をしたということになるだけだお！？ そこんとこ、どう反論するのかなあ！？」

「わ、わかったわよ！ 確かに買いましたよっ、これ……」

そういつて手提げバックを見せ付けてきた。

「……バック？」

「馬鹿ねっ！ 300円でバックが買えるわけじゃないでしょうがっ！

これよ、これっ」

ひよこの、キーホルダー。

「はあ、こんなもののために俺の金が回るなんて……」

「これで満足？」

「俺はさ、お前が何に金を使ったとかどうでもいいんだよっ。俺が何にキレてるかって……、なんで金を知らない奴にその使い方を教

える！！？？　つてとこなんだけど……。金は人を汚すんだよ？
それを知らない純粋な子になんで教えるの？　純粋な子は純粋に育
つてほしいと思わないわけ？」

「はあ？　つーか、あんたは父親ですかあ？」

勇人は相手がボケたのツツコミを入れよう——という気力がなくな
ってしまった。お金のショックも大きいが、何より昨日のことを
思い出すだけで涙が出てくるほどの最悪の1日だったから。

なので勇人はひどくうな垂れて、

「はあ、俺もあの父親に会ったら、人の家に勝手に現れたり、人
の金を勝手に使ったりして、こういう教育をしたのか聞いてみたい
……」

頭上にいる靈魂の数が増えたような気がする。

「も、もしかして、ホントに複雑なご家庭……だったりしたあ？」

何を聞いてそう解釈したかわからないが少女の目が真剣な眼差し
になっていることが、勇人にとっては逆に辛い。

「もういいい。テメエーには関係ないことだから……」

と、ここまで落ち込んで、やっと脳が回転し始めた。

なぜこの少女にもこの靈魂が見えるのかという疑問から脳裏に浮
かぶ。

「ん！？　お前、これが見えるのか？」

自分の頭を指差して訪ねる光景は、周りから見ればアホ見えてし
まうほど変だった。

「さつきから、『お前』とか『テメエー』とか呼んじやってくれて
るけど、私は氷条こじょう歩あゆつて名前なまえがあんの！　あんたは？」

「なんで金を取られたテメエーに名を名乗る必要があるんだよ……。
つで、話を戻すけど、氷条さんはこれが見えるんですかあ？」

生憎、勇人はこの氷条さんに付き合っている暇などない。居候し
ている甘党野郎のめんどろを見なければならぬのだ。ただ、この
靈魂という奴がなぜ見えるのか、というささやかな疑問の答えを聞
ければそれでいいのである。

「つたく。……まあ、見えるけど？　それがどうか

突然、氷条の唇が動くのをやめた。

その丸くなった目は、勇人ではなく、その向こう側を見ている。

「ん？　どうかしたか？」

勇人がその目線の先を確認するために後ろをむくと、

左手に大斧を装備した黒い岩人形^{ゴーレム}がこちらにゆっくり向かって来
ていた。

岩人形^{ゴーレム}とは言ったが、その大きさは体育館で召還された一般的な
ゴーレムとは大きさや形状も違う。大きさはさっきのゴーレムの約
1.5倍の5m。形状は見た目黒い岩でできた巨体の人形で、右足
首に鎖鉄球をつけ、頭から腰にかけて黒い布が被^{かぶ}さっている。

勇人たちから見る限りでは、『実体の強化されたゴーレム』にし
か見えないのだが……。

「あ、あんた呪われてるんじゃないの！？　昨日のことと言い、ど
うして変なのばかりあんたに纏^{まと}わりついてのよ！？」

「し、知るかよ！　俺が聞きたいくらいだっ……」

そう言いつつも二人の顔は恐怖一色に染め上げられていた。

だが次の瞬間、二人の恐怖心はより一層深まることになる。

「おい……、あんなデカイ怪物がいるってのに、『誰も気づいて
ねえ』……」

周りに人間はたくさんいる。しかもこの新学期初日の下校時間は
だいたい学校は同じはずで、家に帰ろうとする生徒で溢れている
というのに、誰もあのゴーレムの存在に気づいていない。

「とりあえず逃げるぞ！」

「え？　ちょ、ちよっと！」

そう言つて無理やり氷条の手首を掴んで反対側に向かって走る。

「おいっ！　お前はレベル何だ！？」

「はあ！？　こんなときに何言つてんの！？」

「いいから！ 何レベルだ！？」

勇人は逃げながら真剣な表情で質問する。

「……レベル、3だけど……？ それがどうかした？」

「じゃあ、この街にレベル3は何人いる！？」

「レベル3はレベル1に続いて、2番目に多いレベルだけど？ 人口にしたいたい、3万人ぐらいかな？」

なんらかの『力』を持っている者は、だいたいレベル3となっているので、学校でもレベル3は2クラスから3クラスあるほどのだ。

「だったら、この中にいる誰かがあいつの存在に気づいてもいいんじゃないの？」

勇人はあのゴーレムを見えない人がいることから、『悪霊』と判断した。

レベルが高ければ『強い』というわけではないが、レベルが高い
『五感が鋭い』ということは当てはまる。レベル3ともなれば、
靈感、つまり『第六感』を持っている人がほとんど。

勇人が思うに、そんなにレベル3がいるんだったら、誰か1人くらい異変に気づいてもいいんじゃないのか、と言いたいのである。

「あんたはあれをお化け、とでも言いたいわけ！？」

「お化け？ んなわけあるか！ あの黒い布！ 左手の大斧に、足首に付けられた枷^{かせ}！」

どっからどうみても、『死神』のもんじゃないかよ！ お化けなんて生ぬるいランクじゃねえだろうがっ！」

その時、周りにいた人達が、不自然に勇人たちとゴーレムを結んだ直線から離れた。なぜかここは通りたくないともいうように「な、何？！」

その瞬間、後ろから追ってくる死神^{デス}ゴーレムが持っていた大斧を地面に思いつき振り落とした。

そこから地割れが生じ、勇人たちを襲ってきた。だがやはり、その地割れも誰も気づいてはいなかった。そこを避けるように歩いて

いるのに、誰一人としてゴーレムを見て驚く者も、戸惑う者もない。

「うわあっ！」

その衝撃に思わず転びそうになるが、うまく二人は地割れを避けることが出来た。

「もお怒った！ あのクソゴーレム！ 粉々にぶつ壊してやるっ！」
エリートお嬢様校、森羅女学院の生徒らしからぬ発言の後、手を天に突き上げて、

『アイスストーン
氷塊！』

すると、ゴーレムの頭上に直径3mほどの氷塊ひょうかいが落ち、ゴーレムは宣言どおり粉々に砕けた、
はずだった。

「え！？ 私の魔法が……効かない！」

砕けたのはその逆、氷塊のほうだった。

しかしながら、氷塊は魔法なので、見える人見えない人なんぞ関係ないため、突然氷の欠片かけらが降ってきた周りの人は大騒ぎ。

「お、お前魔法使いだっただのか！？」

「今はそれどころじゃないでしょ！」

能気な勇人に一喝したあと、だったら！ と呟つぶやいて右手をゴーレムに勢いよく向けると、

「これはっ！！」

そう叫んだ氷条の手から放たれたのは氷柱ひしじ。

無数の氷柱がゴーレムを襲った。が、またしてもその氷はガラスのごとく粉々に砕け散ってしまった。

「か、硬い……」

岩と氷、どっちが硬いか、という問題の答えは、密度にもよるとは思うが、たぶん『岩』だろう。だが、岩のほうが硬くても、氷で何度も叩けば、傷が付くか、多少欠けるといった状態になってもい

いはずなのに、この岩は『硬い』というレベルではなかった。ダイヤモンドで叩いても傷一つ付きそうにない、『無敵』という言葉がふさわしいほどの次元。魔法でも壊せそうにはなかった。

当然、それぐらいの頑丈さを誇るこの怪物を、この何の力も持たないレベルの勇人が倒せるわけもなかった。

「おいおいっ！ どうするだよ！？ このままじゃっ、殺られちゃうー！」

「ちよつと黙っててっ！！ どうせ何も出来ないんでしょっ！」

そう言われるとさすがの勇人の言い返すことはできなかった。何もできないのは事実。だけど、このままでは殺されてしまうという恐怖が勇人を焦らせた。

「じゃあこれならっ！」

今度は空から雨……ではなく氷の針。

無限というほどの氷の針がゴーレムに突き刺さる。

ゴオオオオオオッ……！！

ゴーレムの咆哮と共にその針は岩の肉体から弾け跳んだ。

さらにそのゴーレムは今までの攻撃の影響をまったく受けずに、ズス力と勇人たちとの距離を縮める。

「おい、早く逃げな……って、お前大丈夫か！？」

氷条のスタミナは既に限界だった。

息を切らして、ひざに手を置きながら、

「はあ……はあ……。きよ、今日が、せめて曇りだったら良かったんだけど……、こんな快晴で、気温28度ともなれば、生憎、私の体力はここまでねっ……」

魔法知識のない勇人には、天候と魔法の関係性がわからなかった。

この森羅は東京と沖縄と沖ノ鳥島を結んで出来る三角形の中心。つまり、雪が降るところか、この10月でも気温30度を超える日もある熱帯の島なのである。

つまりは、氷を司る魔法使いにとつては、今の自然環境は不利な状況にあるということだ。

「はあ？ 何訳のわかんねえことをっ……。さっさと逃げるぞ！」

「はあ……。む、無理に……。決まってるでしょっ……」

ここまで来て本当に氷条に体力がないことを承知した。

かと言つて、勇人1人逃げるわけにも行かない。

これの原因が、何か自分のような気がして。氷条を巻き込んでしまったような気がして。

勇人は死ぬ覚悟を決めた。

「ゴオオオオオオオオオッ！！！」

ゴーレムはいつの間にか勇人たちとの間を3mまで狭めていた。

無論、あのリーチの長い腕と、どデカイ大斧で、この距離なら勇人たちを仕留めることは容易いことだった。

「ッ……！！！」

勇人の予想通り、ゴーレムはそのデカイ大斧を振り上げた。

あとほんの数秒で自分が死ぬということを想像すると身体が凍りついたように動かなくなった。

こんなときに限つて、あいつはどうして現れないんだっ。と、勇人が家にいるはずの裕を思い出しながらも、ゴーレムは容赦なく、その大斧を振り降ろ

ボオウッ！！

それは火の玉。

と、思った勇人であったが、実際は手の燃えた人間がゴーレムにパンチを浴びせたのだった。そのおかげで勇人たちは難を逃れた。

「お望みどおり、来てやったぞっ」

その無感情の声に勇人は思わず自分の耳を疑う。

その声主は家で腹を空かして待っているはずの裕だった。

XI 亡霊は止まる

その火の玉は、ゴーレムの頭に右から衝突したあと、勇人の目の前に着地した。

「ひ、火向先輩！？」
ひむかい

それは半袖ブラウスに赤い生地^に黒のチェック柄、どここまでは氷条の制服と変わりなかった。だが、その上から赤いパーカーを身に着けていて、気温28度という今の森羅にはまるで合わない服装であり、それを見ていた勇人もそのせいで体感温度が上昇したような気がした。

氷条が火向と呼ぶ、明らかに森羅女学院の生徒は赤いパーカーのポケットから卵型の黒いボタンが付いた小さな機械を取り出した。

その時、さっきの衝撃でバランスを崩したゴーレムが体勢を立て直し、火向に向かって拳を振り落とす。

ボウツ。その瞬間火向の左手が燃える。

すると不思議なことに、振り落とすはずだったその右手はその炎を怖がるようにして、一時的にその拳を止める。

それを確認して、カチツと火向がその黒いボタンを親指で押すと、

『ビーー！ ビーー！ 非難命令避難命令！ 速やかに近くの防衛施設、公共施設に非難ください』
すみ

街中にある煙突状の機械『解析機^{スキャナー}』が、赤い光を点滅させながら、機械独特の音で周囲に非難を呼びかける。

突然周りの住民はキレイに勇人たちの前から次々と姿を消し、やがて誰一人として視界に入らなくなった。

ゴーレムと火向を除いて。

「ほらっ」

不意に裕が勇人に向かって白い箱を投げつける。

「ッ！」

危うく落としそうになったがなんとか受け取った。

『箱』という名の『カメラ』を。

「あとこれっ、カートリッジ」

また不意に投げつけてきたのは2つのやや小さめの黒い箱。

これまた落としそうになるがギリギリで受け止める。

「1つにつき10回だから、30回は撮れるな、これで」

「じゃ、じゃあ、こいつであの怪物を撮ればいいんだな？」

確認するまでもないことだったが、勇人が考える『カメラで怪物を消す』ということを確認にするために聞いてみた。

「いやあ？ あいつは非契約霊体じゃないから……。今回はお前の出番はないぞ？」

……。

ではなぜ裕はここに来たのか、という理由の解明に勇人は挑戦してみる。

「……、じゃあこのカメラは何のために渡したの？」

「人の物をいちいち預かってる暇はないんでなっ。とりあえずいい機会だし、今渡しておく」

国語の教科書を忘れ、他のクラスに借りにいき、借りた相手の国語の授業は5時間目なのに、2時間目の休み時間に教科書を返しにいく、っていうあれか——と勇人は解釈した。

（うう……。めんどくさい奴……）

「——聞こえてるぞっ」

「げっ！」

珍しく若干不快な表情を浮かべる裕。

そういえば、裕は勇人の心を読むことができる。それで裕に助けて欲しいという願いが叶ったのだらう。

それにしても、目の前でゴーレムを怯えさせてるこの少女は何者だ、と勇人は疑問に思う。

「裕さん」

その何者かわからない少女の第一声に勇人は驚く、というより戸惑った。

「ひ、ひろし……さん？」

「あなたの言ったとおり、この怪物は炎に『弱い』……というより、『怖い』ようですな」

「ああ。だが、長時間は持たないぞっ」

勇人はさらに戸惑う。

家にいたはずの裕が、突然ここに現れたと思ったら1人の女性と知り合っており、しかも「裕さん」と言うまでの関係になっている。なんととは……。

もはや驚いていいのかわからない。

「ど、どうなってんの……これ？」

その意味は複雑で、『この怪物がなぜ俺を襲う！？』と『二人はどういう関係！？』という二つの意味を成していた。

「あいつは亡霊フアンタムと言ってな、悪霊の一種だ」

「どうやら『この怪物がなぜ俺を襲う！？』というほうを解釈したようだ。」

「で、でも悪霊の一種ならどうしてカメラでどうにもならねんだ！？」

「あいつは恐らく召喚された亡霊だ。カメラは非契約霊体しか吸い込めない」

恐らく。

それは裕にも詳しいことはわかないとでも言うようだった。

つまりそれは、定まった倒し方は誰にもわからないということも意味していた。

「裕さん」

勇人はこの呼び方に少々抵抗があった。まあ、きっぱり言えば好きではなかった。

少し不快な表情を浮かべながらも火向の言葉に耳を傾ける。

「——あの怪物は、魔法そのものですか？ それとも召喚、又は喚かんき

起ですか？」

少なくとも勇人には理解できなかった。

第一そんなことを聞いてなにをしようというのか。

「喚起だけど？」

「ではやってみたいことがあります」

その時、時間という奴がきたらしく、ゴーレムが再び右拳を振り上げて落とそうとする。

「俺が援護してやる」

勇人の背中に突然熱気が伝わってきた。

「ゴオー！」という轟音を立ててながら、裕が燃え盛る赤い狼へと変貌する。変貌した姿で裕がゴーレムの右拳に飛び掛かった。

すると、やはり少し怖いのか躊躇しながらも裕を振り落とそうと暴れまくる。

「歩……、まだ動ける？」

裕に喋る口調とは変わり、姉のような声でまだを息を切らす氷条に優しく聞く。

「は、はい……。あと一回ぐらいなら……」

「じゃあ、ゴーレムを凍らしてちょうだいっ」

「やってみます……」

そう言って立ち上がり、両手をゴーレムに向けて、

『アイスキューブ
氷牢ッ……』

その瞬間、ゴーレムは手と足元から徐々に凍り始める。

亡霊と呼ばれたゴーレムは次第にただの氷の彫刻と化していく。

そして完全に彫刻になってしまったあと、氷条はそのまま地面に倒れこみそうになるが、それを勇人が後ろから支え、自分の腕の中でキャッチした。

その氷を溶かさないようにと、裕は変貌を解除することなく火向の目の前に着地する。

「では、国名。界名。魔術式。あと、それに使われた言語をできるかぎり教えてください」

「国名はイギリス。界名はロンドンの墓地としかわからないけど、言語は英語だ。だた、その……、まじゅつしき？　って奴は俺には理解できねえぞ？」

それを聞いた火向は満足したように頷いて、

「——それだけわかれば十分です」

しかし、氷の彫刻と化したゴーレムはその怪力で、徐々に氷にひびをいれ、氷の呪縛から解かれようとしていた。

火向はそれでも急ぐ素振りも見せず、人差し指を地面に当てる。

『バイロスベル
炎陣』

そう静かに言うと、ゴーレムの足元中央に一つのロウソクの火のような炎が現れた。

裕が飛び散らせた火の粉とか、そこに紙があってそれが燃えたとかではなく、何もない場所から突如炎が現れたのだ。

無論、彼女はせっかく後輩が凍らせたゴーレムを溶かそうというわけではなく、まるで地面に当てた人差し指とシンクロさせているように見えた。

火向が地面に六角星ろっかくせいを描く。

すると同じようにしてゴーレムの足元の小さな炎も地面を焼いて六角星を描く。

もちろん地面は石なので、彼女の六角星を描いた場所には何も描かれてはいない。だが、不思議なことに、目の前にあるゴーレムの下ではそれとまったく同じようなことが起きていた。

次にその指を離すことなく、星の六角星を結ぶようにして円を描く。

これもまた、同じようにして炎だけがその図形を描いていた。刻々と氷が砕け散る中、そのペースを乱すことなくゴーレムの足

XII 乙女から見れば獣

「喚起を解除するとは……、お前、ただ者じゃないなあ……」

裕はそう言いながら元の姿へと戻った。

「ふう〜。——それより、あの怪物はなんだったんですか？ 私^{わたくし}たちには見えないようでしたけど……？」

「俺にも詳しいことはわからねえ。……ただ、誰かが勇人を狙ってるってことは確かだ」

二人に安堵の表情はなかった。

あの亡霊^{ファントム}は、術を解除しただけであって、本当に倒したわけではない。またいつ現れてもおかしくない状態にあったからだ。

そんなことも知らずに、勇人は腕に白い箱と黒い箱、氷条を抱えながら安堵のため息を漏らす。

「とりあえず、あなた方は早く家に帰った方がいいです」

その声に似合わない敬語（お嬢語）と、あのゴーレムを消し去った魔法に勇人はこのお嬢様は何者なのかと思う。

「歩は私が引き受けますので……、その……、一度地面に降りして頂けますか？」

「へ？」

意味が理解できなかった。

歩を引き受けるのなら、そのまま勇人から受け取ればいいものの、彼女はあえてそれを拒んでいるようだった。

勇人はしばらく考え、意味を理解したあと、火向に氷条を差し出しながら、

「何も地面に降ろさなくても、俺から直接受け取ればいいだろ？」

「いえ……、」火向は勇人を避けるように身を3歩程退いて、「だから、その……」

……」

（だからなんなの……？ 重いんだけど……）

微妙に頬を赤く染めて、もじもじしている。

それを見て何かを察した裕が勇人の肩を叩いて、

「その子を俺に貸せっ」

「え？ あ、ああ……」

なんだかわからないが、この重みから開放させるのなら……、と氷条が心を読めていれば、『アンタはレディーに対してのデリカシイはないのか、ゴラァ！！』とでも言いそうなことを思いながらも、氷条を裕のもとへと渡す。

裕がそこからどうするのかと思えば、

「ほいつ」

と、あっさり火向に引き渡した……。

「ど、どうも」

「ど、どうも。じゃねえーよっ！！ 何なんだよ！ 何故に俺から引き取るのは嫌なんだっ！ 俺が嫌いなのか！？ 生理的に無理なのか！？」

「いえっ、そういうわけでは……」

「じゃあ何！？ そういうわけではないのなら、どいうわけなんだ？ …… わかった。言ってもいい。その理由を全部吐け。何を言われても気にしないから、況してやその方が俺は楽だから」

「そうですか……？ じゃあ言いますけどお……」

そう言いながらも勇人の心臓は風船のように繊細せんさいであつた。針一本でも刺されたた気絶しそうな状態にある。

「——『男』だからです」

……、はい？」

「私は男を『人間』として見ません。『獣』として見ます」

「そ、それは差別……？」

「いえ、差別する価値もありませんから……」

……」

どおりで勇人に触れようとしなないわけである。

しかし、そうなってくると一つ疑問の浮かび上がってくる。

「じゃあ、この隣にいる『男』は何なの？」

勇人はゆっくりと裕を指差しながら火向を睨みつける。

「え？ ああ、この人は『男』って感じではなく、ただの『人』というオーラを放っているの……」

「オーラって何？ 見えるんですか、そのオーラって奴は？」

「見えるというより感じるんです」

「……あんた、さっきから思ってたけど、何者だ？」

「自己紹介がまだでしたねっ。私は森羅女学院高学部2年、生徒会メイジャー及びMHPマジカルハントボリスに所属する、レベル6の……」

声質からして、明るくて元気な子って感じなのでお嬢語がまったく似合っていないかった——という思考はさて置き、勇人は『生徒会メイジャー』
『MHP』エムエイチピー『レベル6』シックス——と言ったこの街での最強単語を3つを並べられて頭が混乱してきた。

「——火向ひむかいひなのと申します」

生徒会——各学校に置かれた学校及びその周辺の治安を維持する組織。基本的に成績優秀で生活態度の良い、レベル3以上の力を持つ生徒で組織され、あの空間移動少女などが良い例である。治安維持だけでなく、学校行事や地域行事等を考えたり、仕切ったりすることもある。

マジカルハントボリス

MHP——メイジャーをそのまま規模だけを大きくした組織。この森羅全体を保安し、主に魔法条例に関しての見張りを行う。この森羅の力を持つ者のほとんどが魔法系統の類なので、それに関する言わば法律を守るため、別名『魔法警察』と呼ぶこともある。無論、所属しているほとんどはレベル5以上の力を持つ。大きな行事の際は、このMHPを中心として行われる。

レベル6——人口の半分をレベル1が、もう半分をレベル2～5が占めている中で、その人口の1%以下を占めるのがレベル6以上の者たち。その者たちを別名『天才』^{ジーニアス}とも呼ぶ。ちなみに脳の覚醒率は50%以上の者がジーニアスとなる。

このように、この森羅のエリート3大校の1つ、森羅女学院の2年次にして、生徒会で特殊警察に所属し、しかも大学院教授並に優れたレベルが『火向ひなの』なのである。

「……………」

なので。

勇人はその場にひざまずき、地面に頭突きする。

「すいませんでしたっ！！　な、なんか生意気言ってすいませんでした！！！」

「い、いえ……そんな謝らなくても……」

『男』が嫌だ——というあつちが悪いのだが、勇人も特殊警察なんぞに目を付けられたくない。

なんせ一生この島からは出られないのだ。こんなところで目を付けられたら、残りの一生は恐怖に支配されてしまう。

このMHPとは、それほどの強力な権力を有しているのである。

「それより、あなた達は早く家に帰った方がいいです。ここも直に^{じき}人で溢れますから」

火向は周りを気にしながら忠告するように言う。

「——私はこれから、このことをMHPの本部に報告しなければいけません」

「え？」

勇人は気になる。

『このこと』とは、勇人のことが、亡霊のことか、はたまた二つか。

「ではこれにて失礼します」

「お、おいっ」

瞬^{シュン}。とそこには何もなかったかのように消えていった。

X I I I 守護霊は糖分が大事

「うう……。今日も最悪の1日だな……」

昨日に引き続き、レベルが突然2ランクも上がり、変な人達がたくさんいるクラスに移動され、お金を取られ、亡霊に襲われ、MHPに目を付けられた(勇人がそう思ってるだけ)という最悪の出来事が勇人を襲った今日。

午後4時を回った頃。

勇人は学生寮の前を通りながらため息を吐く。

学校から勇人の住む学生寮との間の距離は5km。時間にしてだいたい1時間ぐらいは掛かってしまうのである。ということは、勇人は8時に始めるHRに対して、6時45分ぐらいに家を出なければならぬという試練に毎朝耐えている、ということになる。

「つか、悪霊を捕まえるって話はどうなったんだ？」

「とりあえず飯だっ」

裕の表情は若干不機嫌に見えた。

まあ、朝のクッキー5箱から、何も口にしていないので当然だろう。

「はあ、あと少しで部屋に着くから我慢しろ……。冷蔵庫には人参とジャガイモしか残ってなかったから……。今日はカレーだなっ」

「やだっ」

「は？」

「そんなインド発祥の香辛料を使った辛い料理なんて俺の好みじゃないっ」

「好みじゃないって……。お前カレーライスという国際的に愛される料理が嫌いなのかよ？」

「当然！」

そんなの当たり前だろう！ とでも言うような顔で言い放った。

「だいたい、カレーが国際的に愛される誰が決めた！？ 食べたあとの胃もたれに、舌を突き刺すような辛さ！ 認めん、絶対にあれが国際的料理だとは俺は認めないぞお！」

（あまりの空腹に『カリカリ』してるなあ、こいつ。……………

……、！）

今のはけして駄洒落ダジャレではない、と自分に言い聞かせる。 勇人自信も気づいているだろうが、今のは駄洒落としてかなりひどい。今の心の声でよかったと一安心したところで話を元に戻す。

「つで、どうすんの？ もう寮の前まで着ちゃったけど……」

「とにかくカレーは嫌だ」

「じゃー……、人参スティックにでもするか？」

「……、ハヤト？ お前は俺をなめてるのか？」

は？ と勇人が反応する前に、

「そんなウサギの主食をどうして俺が食わないといけねえんだ！？」

冗談なのか本気でそう思っているのかはともかく、勇人は裕の心中を探ってみることに。

「じゃ、じゃあさ、…………何が食べたいの？」

「糖分」

やっぱり。

「糖がなきゃ、頭が回らないだろ？」

幽霊というジャンルに脳みそなどあるのか？ という疑問を抱きつつも、この極度の甘党に勇人は頭を悩ませる。

「おいっ」

その声は裕ではなかった。

不意に後ろから声を掛けてきたのは、病院又は家で寝込んでいるはずの氷条だった。

「いやあ、今頭を回す必要はないと思うぞあー？」

だが、勇人はここでプラス思考に考えて、氷条がそこにはいない、

と自己暗示をかけ、わざとらしく会話をつなげる。

「って、無視すんな！」

「ッ！ 冷たっ！！」

不意にも氷条は勇人の首をガツシリと掴んだ。

その手の冷たさは、彼女が氷を司る魔法使い——という理由ではなく、単に明らかにさっきまで右手に持っていたであろう、キンキンに冷えたアルミの缶ジュースを左手に持っていたからだだった。よって彼女の手はそれによって冷たく支配されていたわけである。

「な、なんだよ！？ テメエー、家で寝込んでいるか、病院送りになつたじゃねーのかよ！」

「私を馬鹿にしてんの！？ それぐらいで病院送りになるほど柔^{やわ}じやないの！」

「はいはいっ、そうですかつ。……それで？ 俺に何の用なの？」

「私は嫌だったんだけど……、姉御があんと話したいって言うから……」

「姉御？」

そう言いながら、視線を後ろへ向ける。勇人もそう方を見ると、ミヤーっ。

「——ミヤーっ。ミヤーッ」

「……………」

何やら道端で、野良猫と会話をしている少女を発見。

勇人と同じ、森羅高校の制服で身を包み、セミロングの茶色い髪の毛、灰色のスカートをぎりぎり校則違反破つてないぐらいのひざぴったりの丈の長さで装備した、見覚えのある幼馴染の姿。「へ、へんしゅう……ちよお？」

その純粹なる後姿は、とても『姉御』などと呼ばれる柄には見えない。

そして純粹なる少女は、純粹なる表情で、

「あっ ♪ ハヤトオー」

純粋な声で、純粋にも勇人に向かって手を振る。

そのあとも、純粋なる少女はネコと会話をし続ける。どうやら勇人の存在に気づいたものの、自分からそっちへ向かおう、という気はないらしい。

それを察した勇人は仕方なく少女のもとへと足を運ぶ。

「ミヤーツ、ミヤツ」

「それで？ このネコが大好きな『姉御』は、俺に何の用ですか？
「な、なんで私に聞くのよー！ こっちに本人がいるでしょうが！」

「勇人はこの目の前にいる氷条歩という氷女と、純粋でネコが大好きな編集長こと守原雪見との関係性がわからなかった」
かみはらゆきみ

「はあ？ 誰に言つてのよ、それ？」

「故に、その関係をこっちから尋ねる前に、そちらから説明してほしいと思う、勇人であった」

「うう……、イライラするんだけど……。だったら素直にそういえばいいでしょっ！？」

「勇人は知っていた。氷条がやや理解しにくいように言わねば、言うとおりにしないことを」

「……マジで、殺すぞゴラァ！」

瞬間、一気に周りの気温が下がり始める。

「お、おいっ、冗談だよ、冗談っ！」

はははっ。などごまかし笑いを加えてみるが無駄なようだ。

「歩」 あんまり派手にやらないでね。他の人の迷惑になるから」

心配する点が合っているようで間違ってる感じの言葉を吐きながらも、ネコが餌を与えられたときのような顔でネコと会話を楽しむ姿は純粋そのもの。

だが、勇人にとってはそれどころではない。

「何がいのっ？ 凍死？ 撲死？ 出血多量によるショック死でもいいわねえ……」

それは勇人に問いかけているのではない。

どうやって殺そうか、と自分に問い質^{ただ}しているのである。

頭の中で考えがまとまったのか、両手を勇人に向けて、

「アイス……、!!」

「防衛及び、特別な許可がある状況ではない限り、魔法の使用は絶対絶対禁止ですけど?」

その瞬間。本当に一瞬の間に、氷条の目の前にポニーテールの女子が現れ、腕を掴みその魔法を阻止した。

「う……わ、わかつてるわよ!」

^{メイジャー}森羅高校の生徒会。

そのやや短い白衣を着て現れた島尻は、その役目を果たしにここに空間移動^{レポート}してきた。ように見えたが、

「まったく、雪見さんが呼んでくれなかったら、一体一体どうなっていたことが……」

「なんだ? お前も編集長に呼ばれたのかあ?」

「あつ、あなたは今朝、うちのクラスに突如やってきたダメダメ君ではないですか!」

「ダメダメって……」

レベル1(だった)、授業態度ダメ、先生を怒らせた、新学期早々の抜き打ち小テスト1点。

確かにダメダメではあった。

勇人に突っ込む間も与えずに、

「つてことは、まさかのまさかあなた達も呼ばれたのですか?」

「いやー……、呼ばれたというか、偶然出くわしたってとこ、だな
っ」

「ちよつと姉御! 私はこんな野郎2匹と、生徒会^{まじめ}ちゃんと一緒にだなんて聞いてないっ!」

ミヤーミヤツミヤーミヤーミヤアミヤーミヤツミヤーミヤーミヤ

ーミヤッ。ミヤッミヤーミーツミヤゝオツミヤッミヤッミヤッミヤゝ。ミヤミヤミヤーミヤッ、ミヤミツミヤーミヤーみゃゝミヤオツミヤーミヤアゝ

「

.....
（汗）」

「

.....
（驚）」

「

.....
（輝）」

いつの間にか守原の周りには数十匹という猫が集まっていた。

3人それぞれ違った表情をしながら硬直する。

「ちよ、ちよっとー。編集長？ 早く人間の世界に戻ってきてくれませんか？」

「ミヤ？」

猫語で返されても勇人には『何？』という風に聞こえてしまったことに驚きを隠せない。

「ッ……。だ、だから、俺たちを招集した目的は何なんでしょうかな？」

外国人……、又は異世界の人とでも話すかのごとく、丁寧にゆつくりと話かけてみる。

「あゝ 全員揃ったね！？」

猫に別れを告げたあと、こちらへニコニコスマイルで向かってきた。そしてポケットから何かを取り出して、

「ジャンー！！」

「！？」

『ファミリークーポン』と書かれていた紙切れ。

「——というわけなのですっ！」

「

.....
（黙）」

「……？ まったくのまったく、雪見さんの意図が見えませんが……？」

仕方ない、とでも言うような顔で、守原に代わって氷条が説明を始める。

「いや、なんかね？ 姉御が福引らしきもので当てた、らしいのよ。でつ、私と行くはずだったのに……」奥歯を噛み締めて、「あんたがここを通りすぎたがためにっ、こうなってしまったのよ！」と、逆切れ。

「い、いやー……、ここ、俺んちの寮の前だからねっ、これ……。通らないことなんてないからねっ、うん……。まったく」

「まあまあ。だけど、ハヤトたちがいなかったらこのクーポンは使えないんだよ？」

全員が、は？ という反応示す。

「ここに注目！」

そう言つてクーポンの下部分に指を指す。

『4名以上の家族様限定！』

「なるほどのなるほどです。私たちを入れて、4名なんですね？」

勇人はその島尻の言葉に何か違和感を感じた。

「そう！ し・か・もっ、4名以上と書いてあるだけであつて、『何名以内』とは書いていないのであるからして、何人でも招待できるのだよ！」

と、自慢気に先生口調で話をまとめる。

内心、勇人はラッキーと思つている。

当然、これでうるさい甘党野郎を黙らせることができるのだ。しかも無料で。自分のお腹も満たせるし、こんな嬉しいことはない。

「てか、そのクーポンいくら分？」

「ふふん、聞いて驚かないですよ？」

……。

「なんと！ 5千円分……！！！」

ファミレスの5千円分……。

でも、1人1250円と考えれば、それほど大きな額でもない。
……という自分の思考にも何か違和感を感じた。

「ハヤト今、『全員』で5千円分って考えたでしょ？」

その言葉に考える時間をなくしたが、その口調からして、

「ま、まさか!？」

そのまさかだった。

1枚に見えたクーポンは守原が扇子のように広げたことによって
4枚になったのだ。

「ずばり! 『1人』5000円であり、合計で20000円とい
うわけなのですっ!」

おお!

「それはそれはラッキーですねえ!」

「さすがは私の姉御!」

ファミレスで2万円かあ……。2万ならもつと高級なレストラン
で食べたほうがいいような気がする——と思いつつも内心かなり嬉
しい勇人であった。もちろん、勇人は貧乏な学生なので、2万円と
いう大金を手にしたことはない。これだけのお金があれば……。、
と、ここでさっきまで感じていた『違和感』の正体に気づく。

守原。氷条。島尻。勇人……。

あと1人いたはず。

ツンツンの髪の毛に生意気とも言つべき無表情な顔に、180c
m弱の長身の身体。そのくせに甘いもの大好きで図々(ずうずう)
しい少年がいたような。

さっきまでカレー断固拒否! という態度をしていた、腹を空か
せた少年の姿見当たらなない。

「なにをキョロキョロしてるんですか?」

「い、いや……。なあ? 髪の毛ツンツンで、ボケーツとした無
表情の顔した長身の少年を見なかったか?」

「い、いえっ。私は私はまったく見てませんけど……。?」

「あのアンタのダチ?」氷条はキョロキョロ辺りを見回して、

「ん？ あの行列……、何？」

後方の50mほど先。

夕日で黒く染まった人影が、寮の入り口の階段の方に向かって列を作っている。

「屋台でも……ある、の……か」

よくよく見ると、それは人影ではなかった。

四足で、何を^{くわ}咥えている……。

動物？

蟻でもあるまいし、動物がこんな行列を作るなんて聞いたこともない。

「な、なんなんですか！？ あれは……」

その行列をクーポンで浮かれていた守原も注目する。

「……？ ……！ 可愛いい♪ みかん咥えてるよお！ あの猫たち！」

夕日が逆光してよく見えないなか、猫探知機とも言えるその目で見事に咥えている品まで当てて見せた。

それを聞いた勇人がすぐさま思考を働かせる。

みかん↓甘い↓糖分↓裕！

「まさか！」

そう声を上げたあと慌ててその行列の先へと駆け出した。

「はい、ありがとね♪ いい子だな♪ お前らっ」

「……………」

……………（硬）……………

そこには珍しくニコやかな顔で猫たちからみかんを受け取る裕の姿あった。

あとから駆けつけてきた女3人は、

「な、なんですかこの人は！」

「アンタのダチって、動物使い（ビーストテイマー）？」

「……可愛い♪」

猫たちは次々とみかんを裕に渡していく。

その数およそ100匹。

どんな手を使ったのかは知らないが、勇人は改めて思う。

(こいつ……、やっぱ怖え……)

「食うか？」

裕は無表情で勇人にみかんを差し伸べるが、勇人は首を振って断る。

女子3人は喜んでもらったそうだが……。

XIV その霊に胃袋なし

一同は街中のあるファミリーストランで沈黙していた。

それは勇人たちだけではなく、周りのお客というお客は全員が沈黙し、ウェイトレスや厨房の^{ちやうほう}コックと言った従業員も皆、なにかを見つめてあ然とする。

現在、この店で何かを口に出しているのは裕だけだった。

スプーンの金属音だけが店に響き渡る。

「ムグムグ……、ッウェイトレスさ〜ん！ 次はこのヨーグルトのプリン、トッピングはメイプルシロップで10個ね」

一番近くにいたウェイトレスが裕の声にビクツと反応して、

「は、はい！」

慌てて厨房へと駆け込むと、それを聞いた料理長も大慌てで注文の品を作る。

「お、おい……、これでどれくらい金を消費した？」

「い、今の今の注文で残りのクーポンは1000円になりましたあ

……！」

島尻の言葉を逆に解釈すれば、裕はもう既に一万9千円も使ってしまったのである。

1人で。

さて、どうしてこうなってしまったのかと言えば、

「さあ〜、お金はたくさんあるんだから、思いついた人からじゃんじゃん頼んじゃって〜！」

という守原の失言からそれは始まった。

当然、勇人としても、裕がデザートを（大量に）注文するぐらい

の予想はできていたのだが、全額2万円、5人いるので、1人4000円分というデザートは食べきれないだろう、という甘い考えもまたひとつの原因。まあ確かに、それはパフェを1人で6個前後食べられるほどの額なので、食べられないと考えたほうが妥当^{だとう}なのだが、ここは『森羅』という変な人たちが集^{つど}う場所であり、しかもその裕という存在は『守護霊』という超自然的な生命体(?)なのであるからして、最悪の状況を想定するべきだったのだ。

話を戻し、そう守原が言うので当然、一番腹を空かしている裕が真っ先に手を挙げて、

「じゃあ、俺から頼んでもいい？」

「いいわよ」

と、守原はにっこりスマイルで答える。

ここで、誰かが止めたり、守原が(言うはずもないが)『ダメ!』とか言ってくればクーポンはキレイに使われたはずだったのに……。

「じゃあ……」

メニュー(当然デザート)を見ながらどれにしようかと、しばらく迷って、

「——これ全部。ハヤト、持ってきていっ」

「はあ？」

この裕の言葉を本気で受け止めたのは勇人だけ。

女性陣はそれを『冗談』だと受け止めたのだ。

それも当然のことで、彼女たちから見れば、裕はただの『天然な人間』という種^{カテゴリー}類に分類されているからである。なので、当然レストランという仕組^{システム}みをわかっている、と思い込んでいる。

「あんたのダチって、馬鹿？」

「注文という注文は、ウェイトレスさんに言うんですよ？」

まだ救いはあった。

だが、この島尻の発言は完璧にそのクーポンを直^{じき}に消滅させることを意味していた。

「うえいとれす？」

「ほらっ、この店ん中に、同じ服着た女の人がいるだろ？ あれだあれ」

しかし、勇人はそれを止めようという気はなかった。

どうせ、全部頼んだとしても食べきれないだろうし、金額も4000円どころか、5000円を切る値段になるが、自分は2000円分ぐらいあれば満足、という感じでそれを許可してしまったのだ。そのウェイトレスというものを理解したところでさっそく、

「えっと……、う、うえいとれすさん？ こっち来てっ」

一番近くにいたウェイトレスが反応してこちらへ向かってくる。

「はい？」

「これにあるの、全部ください」

ウェイトレスは少し戸惑った様子で、

「え？ あ、あつ、はいっ！ ではご注文を確認しますね」

——パンケーキ、アイスクリーム、パフェ、プリン、ワッフル、クレープなどなど、長い確認^{リポート}のあと、ウェイトレスは一つお辞儀して厨房へ。

しばらくのあと、テーブルいっぱいのおと油と糖分に全員は絶句。もちろん裕を除いて。

「頂き」

その時だけ見せる満面の笑みで、味わっているのか、という疑問が浮上するほどのスピードで次々とそれらを平らげてしまい、さらにお構いなく次から次へと注文していった結果が、

「ごちそさま」

合計22680円。

クーポンを使い切ったどころか、オーバーする結果となっていた。

無論、そのはみ出した金額と自分を含める4名の夕飯代は勇人が

支払うことになった。

「うう……、最悪だあ……」

「この方は……、一体全体何者何ですか!？」

「ああ、ちよっとシヨックかも……」

「アンタらは……まったく……」

驚きと悲しみはともかく、怒りの方に勇人は身の危険を感じる。

「い、いや、俺のせいじゃない……だろ？」

「アンタのダチでしょ!？ アンタの責任だろうがぁ!」

「うう……」

さすがに勇人も甘党までは把握^{はあく}できても、大食い^{はあく}とまでは気がつかない。

だが、今そんなことに気づいても仕方がない。

問題は、どうやって埋め合わせをするか、それとお金はどうするか。

「俺は守護霊だぞ？ 胃袋なんて言うものはない」

「……はぁ!？」

確かに、着ている制服がはち切れるどころか、食前とまったくその腹は変わっていない——という思考はあとにして、勇人は『守護霊』という言葉に仰天する3人の相手をすることに。

「守護霊!？」

「あ、あ、アンタって奴は! なんてお化けなんかと一緒に居んの!？」

「胃袋がないとは一体全体、何事ですか!？」

1人だけツツコミどころが違うが、とりあえずスルー。

「い、いやぁ……、そ、そういうわけなんだよぉ……これが」

「そういうわけって、どういうわけなの!？」

「はつきりしろっゴラァ!」

「……胃袋がないということは……、人間ではないということでしょうか……?」

1名を除く女性陣に押しつぶされそうになる。

「わ、わかったつ。説明するから……！」

と、言うわけで、勇人は裕との出会いからこれまでの成り行きを話した。

朝起きたら突如現れたこと。

なぜ裕が制服を着ているか、ということ。

悪霊の捕獲のこと。

お金のこと。

亡霊のこと。

とにかく関わることほとんどを話した。

「ふ〜ん。それで私と偶然出会ってしまったわけね〜」

はあ〜。と氷条がため息を吐き絶望する。

もちろん、勇人たちと出会わなければ、今頃ファレスで食べ放題で苦しんでいたはずなのに、という意味である。

「で？ それがその例のカメラ？」

「あ？ あ、ああ」

守原が勇人の手の中にある白いカメラを指差す。

「こいつが言うには、非契約霊体を吸い取ることができるって話なんだが……」

「？ 非契約霊体って何？」

さっきまで絶望に浸っていた氷条がその言葉に反応した。

「誰とも契約を交わしてない、一言で言えば『悪霊』だ」

「！」

その言葉に一瞬目を丸くする氷条。しばらく考えて、真顔に戻り、

「ふ〜ん……、じゃあ、それ私にちょうだいっ」

「はあ？ なんでデメエーに渡さないきゃいけないんだよっ？」

すると氷条は何か悩んでいるような顔をして、

「そ、それは……」

「あー！」

その話を折るようにして、守原が何かを思いついたように声を上

げる。

「勇人のレベルが突然上がったのって、このヒロシ君と関係があるんじゃない？」守原は人差し指を立てて、「ほらっ、靈感^{ひんぱん}って、靈を頻繁に見ると、目覚めるって言うじゃない？」

「え？」

勇人は隣にいる裕を見る。

思えば、裕と出会ってから靈魂とか、悪靈とか、亡靈とかを見るようになったのは確かだ。

「……………編集長？ その話もっと詳しくお願いします」

「超心理学では、脳は存在しないと思ってるものを確認すると、『存在しない』から『存在する』にスイッチを切り替えるようにしてその情報を変えてしまうの。それで、今まで視覚で捉えられなかったのも、見えるようになるわけ」

「それで？」

「つまり、ヒロシ君の存在を認めた時点で、勇人の眠っていた脳の一部が覚醒したってこと」

（やっぱりこいつのせいであのヘンテコクラスになったのか……）

と、ひどくうな垂れて絶望モードに突入。

「じゃあ、テメエと、あの火向とか言う『天才^{ジーニアス}』も、俺と同じ靈感を持つてるのか？」

「違うぞっ」

あれだけデザートを食べておきながら、躊躇^{ちゅうちう}することなく会話に参加。

「——俺に触ったり、喋ったりした奴はみんな契約靈体が見えるようになるんだ」

「ひっ！？ それってまさかのまさか、私たちもお化けが見えるようになるということですかぁ!？」

さっきまでどうして胃袋がないのか、という疑問と格闘していた島尻が目を丸くして仰天する。

契約霊体ということは、非契約霊体の反対、つまりさっきの亡霊
ファントム
が一つの例である。

すると何かを思い出したような顔をして、氷条が軽くテーブルを叩く。

「って、このアンタのダチは、どうやって火向先輩に触れたり、喋ったりしたのよ!？」

そう言われてみれば、と勇人も呟く。

火向という最強女子生徒は、『男』が嫌い。だから例え、『オーラ』ってやつで裕がそんな風に見えなかったとしても、極力は触れたり話したりはしないはず。だが、彼女には亡霊が見えた。レベル6という脳が異常に覚醒しているせいもあるかもしれないが、二人がいきなりの登場で『裕さん』などという関係になるはずがない。となれば、守護霊と男嫌いはどつか別の場所での出会い、意気投合したか何かのきっかけで仲良くなった——という結論にたどり着く。

それに答えるように、裕が回想を始める。

「俺が、ハヤトを探しに行こうと、外へ出たら……」

勇人は外に出たことぐらいは許す。

「——女の人が近づいてきて、」

それが火向——

「『森羅勇人』……、』って睨みつけられた」

——ではなかった。

「おいっ、ちよつと待て！ 何今の回想！？ 俺の名前呼んで睨みつけるって何事だ！？ そいつどんな奴だよ!？」

「えーっと……、背は俺ぐらいで、へそ出してて、ミニスカートだったな」

「それって、先生じゃない？」

守原が勇人に攻撃を仕掛ける。

「そ、そんな先生いたっけか？」

「居たよ！ 確か、2年の教師で……、ほらっ、今日の銃刀カップル戦のときに、岩人形を召喚した先生!」

さらに追い討ちをかける。

その先生の名は『レベツカ・紅』^{くれない}という、欧米だと『レベツカ』が名前で、日本だと『紅』が名前という、どっちが名前がよくわからない名前なのだが、そのレベツカという先生は勇人たちの学校ではかなり有名な先生だった。一部では人気だが、また一部では嫌われてる、というよりは関わりたくない的存在なのだが、これだけは言える。

『危ない先生』ということは。

「マーク……？　もしかして俺、マークされたの？」

「はははあ！　バツカじゃないの〜！？　そりゃ、学校の日に学校の時間に外にぶらついてる奴がいたら、マークするに決まってるでしょー！？」

「うっ、確かに……」

勇人は裕の着ている『自分の』制服を横目で睨みつける。

「なあ、島尻？　お前生徒会^{メイジャー}だろ？　この哀れなる少年のために、その先生に事情を言ってくれない？」

子供が母親にほしいおもちゃをねだるような顔をして手を合わせる。

「うう〜……、」

しばらく考え悩んだあと、わざとらしく、

「——あっ！　わ、私は私は仕事を思い出したのでこれにて失礼しますー！」

「お、おい！」

勇人が瞬きした瞬間にはもう島尻の姿はなかった。

その代わりに千円札がそのテーブルの上に舞い落ちる。

「……これで勘弁^{かんぺん}してください——ってか？」

まあこれで、はみ出した料金のプラスにはなる。

「まあ、それもそうよね〜。だって、あの先生の怖さを一番知ってるのは、生徒会^{メイジャー}なんだから……」

勇人はその言葉に首を傾げて、

「氷条？　なんでお前がその先生のことを知ってるんだ？」

「はあ。あの先生、森羅高校を中心とした、地域の学校に姿を現すのよね。言わば『見張り』。私たちも困ってるのよ。あの先生、注意とか指導はしないけど、学校の他の先生に告げ口すんのよねえ。ホントツ、迷惑もいいところ。だから、ここ一帯の学校生徒のほとんどは知ってるってわけ」

氷条はさらにため息を重ねて、

「しかも、この地区のメイジャーの指揮官的存在らしくて、メイジャーの生徒はもつと悲惨らしいよ」

と、勇人から灰色のオーラが漂っている。

「はあ……。そんな先生に俺、マークされたのかあ……」

それと反比例して、楽しそうに浮遊する靈魂。

その光景に守原は、

「何それ？」

「それは靈魂と言つて、マイナスな気分、特に『落ち込み』のときに発生する靈の子供だ」

その素朴な疑問に裕が丁寧に答える。

「それは周りの人達には見えないの？」

「こいつは契約靈体だから、俺に触れるか、喋るかしないと、見えないな」

その落ち込みモードの中で勇人に疑問が浮上する。

「契約つて、誰と契約してんだよ？」

「ハヤト、だけど？」

それを聞いてさらに靈魂の数が増え始めた。

「マジかあ……」

と、ここで氷条がやっと話が大幅にズレていることに気がつく。

「——って、すっかり話がそこに行っちゃったけど……。それで？　火向先輩とはどうやって知り合ったわけ？」

「えっと……。それから、美味しそうな看板を見つけたから、その店に入った」

美味しそうな看板とは無論、デザート系である。

「——そこで、パフェを食ってるあいつがいたんだが……」

「は！？先輩、パフェ食ってたの！？」

何故か異常なまでの反応をする。

「そうだけど？」

その反応に相変わらず無情で答える裕。

（私も誘ってほしかった……）

ガクーン！と肩を落としてしょんぼりする。

「どうやら、『パフェ大食い』らしきイベントをやっていたらしく、食べられないようだったから——」

『——食わないんだったら俺が食うぞ？』

『うう……、ど、どうぞっ……』

5分も立たないうちに、高さ60cmパフェを食べ終えてしまった。

『あ、ありがとうございます……。おかげでお金を払わずに——つて『男』！？』

『ん？それがどうかしたか？』

『い、いえ……、別に……』

「——的な感じで知り合ったってところだな」

当然、全員が亦然。

「高さ60cmって、もうふざけてるとしか言いようがないなあ、こりゃ」

勇人は『もう既にそんなに食って、腹が減ったとかぬかしてたのかよ……』というツツコミはあえてしないことにする。

するといきなり氷条が勇人の制服の襟を掴んで、

「アンタ！突っ込むとこそこじやないでしょう！——」

「ツ！？は、はいい？」

「あの絶対男立入禁止の火向ひなの様が、こ、こい、こいつと！

………「そ、その」

何か言いづらいことでもあるかのようにためらいを見せる。

「だから、あれよあれ」

「悪いんだけど、お前が俺に何を求めてるのかさっぱりわかんないんだけど……？」

「……、つまり、同じ物を一つの物で二人で食べるっていう……」
「ああー！ と、それを理解した守原は、

「――間接……ッ！」

と、いい終わる直前で氷条は、守原の口を手で無理やり塞ぐ。

「かんせつ？ 何？ あの子『関節』でも弱いわけ？」

「………、アンタって人は……！」

「そうかあ？ 関節が弱いようには見えなかったぞ？」

プチンッ！ と、氷条の中で紐ひものような何かが切れる。

「――この……、『鈍感野郎共』があー！！！！」

その瞬間、男二名は、頭部に強打撃、全身に悪寒を感じた。

XV 魂は色々ある

ハックシュンツ！

「あゝ……。まだ悪寒がするよ……。つたく」

鼻をズルズル鳴らしながら日の暮れかけた道を歩く。

「お前はいいよなあー。幽霊なんだから悪寒とか感じないだろ？」

午後6時。

10月なのにも関わらず、気温は一向に下がる様子を感じさせない。

だが、寮に向かってひたすら歩き続ける二人にとっては、その暑さなどは感じなかった。

とあるファミレスでとある少女を怒らせてしまった結果、彼らは冷凍保存状態にされ、尚且つ氷の塊を頭部にぶつけられ、瀕死の状態まで追い詰められて、『まあまあ、それくらいにしといたら？』などと笑いながらその姉的存在が止めに入ったため、なんとか命は助かった。

払うはずのお金は、当然その二人から借金をするはめになり、しかも例の氷女から『あと、今日のクーポンの分は、「一生食事おごり」の処分で勘弁してあげる』などとふてぶてしい笑み浮かべて『一生借金地獄』という重い刑に処せられてしまった。

というわけで、彼ら（主に勇人）は肉体的にも精神的にも大ダメージを受けてしまったのである。

「しゅ、シュゴレイをな、なめるな、よお……」

どうやら勇人の『守護霊だから感覚はない』という考えは違ったらしい。小刻みに震えながらも、無表情を保とうと努力しているが、身体はまったく言うことを聞いてくれないようだ。

しばらくの間、その冷え切った身体が少し温まるのを待って、

「確かに、お前らのように五臓六腑なんて物はないが、第六感^{シックスセンス}を含む、五感と血液は備わっている！ 即ち^{すなわ}、血液系統に関する以外の

病気にはならないが、寒さ、暑さ、痛み、快樂、感情、その他諸々もろもろは感じる事ができるんだ！」

無情キヤラはどこへやら。どうやらこの守護靈さんは、感情のスイッチが入るとことんその感情に吞まれる傾向があるらしい。

「ん？——つてお前胃袋ないなら、カレーが嫌いの理由の一つと上げていた胃のもたれはなんなんだよ？」

「ハヤト？ 人の話聞いてたか？」

「は、はい……」

まるでお母さんのような口調に改まった返事をしてしまう勇人。

「確かに、お前らのように五臓六腑なんて物はないが、第六感シックスセンスを含む、五感と血液は……」

「おいおいおいっ！ お母さん！？ さっきと同じ話をしようとしてるんだけど！？」

「ん？ じゃあ、何が聞きたいんだ？」

「だからあ、胃袋ないならカレー食べても胃はもたれませんよねえ？——という素朴な疑問に答えてもらいたいんだが……」

裕は呆れて、

「よく考えてみる？ 五臓六腑がないなら、その空いた空間は全部血液とでも言うと思うのか？」

「あつ、確かに……」

「俺が霊体類にも関わらず、一般人、お前らが言う『レベル1』にも見えるのは、『実体』サブスタンスという霊術のおかげなんだぞ？ それがないかったら、お前如きごとに俺が見えるはずがない」

勇人は最後らへんの言葉に少タイラつと来たが、とりあえずそこは突っ込まずに話しに耳を傾ける。

「——いいか？ この世なかにはすべてに『魂』が宿っているんだ。それは生命体だけじゃないぞ？ 物や機械も例外じゃない。俺はその魂を実体化させて、『偽もの』の五臓六腑を身体に宿しているからして、人間と同じように胃のような感覚があるわけだ」

「いやいやいや、じゃあ、あの100人前とも言つべきのデザート

の量は何なの？」

「当然、魂にも種類がある。俺はそれを克服するために、俺の五臓六腑は1000人前の糖分と油を摂取できるように作られているんだ。」

「マジかよ……」

とんでもなく都合のいい話ではあるが、あの大食い甘いもの好きなことからして、この際、何を言われても真実だと受け止めざる終えない。

さて、そんな話をしている間にも、勇人たちは寮に着いてしまった。

エレベーター——などというハイテクな機械はこの学生寮には存在しないので、階段で自分の部屋——最上階を目指す。

「——だから、俺に急所というものはないが、魂を抜かれれば『死ぬ』のと一緒になんだぞ？」

「ふん」

裕の話を軽く受け流したあと、辺りを見渡せばすっかり薄暗くなっており、やっとの思いで部屋に到着。

部屋に入るなり廊下を駆け、奥の部屋のベットへと飛び込む。

「あゝ、やっとの思いで帰ってきた我が家！」

守護霊が突如現れ、学校では喧嘩という名の殺し合い。レベル3に繰り上がり、変人が集うクラスに移動し、亡霊に襲われ、金を取られ、食事に誘われたが、守護霊のせいで借金地獄にはまってしまう——という、やっとの思いで帰ってきた我が家なのであった。

と、

「じゃあ、さっそく悪霊狩りに……」

「——ふざけんなあ！ 今日ば散々だったんだぞ！？」

人間には我慢の限度というものがある。

現在その勇人はその状態の真つ最中であり、裕が感情を『恐喝』に切り替えたとしても、維持でも外には出ない気でいた。

「だって、このままだと世界が滅びるって言ってるのに、それを信

じないんだから、身体でそれを知ってもらうしかないだろ？」

それは遠まわしに『死んだらわかる』と言ってるようなものだ。

「わかったわかった。昨日はあまりの突然のことで信じなかったが、お前の胃と、たださえフアンタジーだった俺の生活がさらに悪化してるんことがそれを証明してるし……。今度はちゃんと聞くん」

「……そうか」

すると無表情の顔に陰しさが加わる。いつものようなポカーンという無表情ではなく、死体のように、怖いぐらいに硬い表情だった。そして裕が話を始めようとした時、

「待てっ」

勇人がストップ、と交通整理をする人のように手を前に突き出す。

「そんな硬い話になるなら、茶でも飲んでからにしよう」

と立ち上がって狭い台所へ足を運ぶ。

裕はそれを理解したように表情を崩し、その場で寝転がった。

何から話すかを考えるように。

XVI 見張り役は語る

——サラサラ——

白い粉が白いティーカップの中に吸い込まれていく。

「……、」

この光景を見てみると、さっきまでの緊張感が徐々に薄れていくのを感じる。

これで何杯目だろうか、とただそのティーカップに注がれる白く輝く結晶をひたすら眺める。当然ティーカップという代物なのだから、中には透明でお洒落しゃれな感じの赤茶の液体が注がれているはずである。

——確かに注がれていた。

しかしそれは、一見普通の紅茶に見えるようでそうではなく、一口でも飲んでしまうと、致死量に達してしまうほどの猛毒が入っていると言っても過言ではない。

その証として、その上品な色をした赤茶色に浮かぶ不自然な透明の紐が見える。よく、シュガーシロップをかけたときに現れる『あれ』だ。

だがこれはもうそんなレベルではない。

そのような紐があるのは水面だけで、カップの底はそれで満たされている。

これはもはや『紅茶』ではない。

『糖茶』だ。

さらに白い粉——粉砂糖を加えて、地球上で恐らく飲める者は蟻ありしかないであろう糖茶を完成させていく。

既に、ここから見えるベランダからは月が顔を出していた。

そしてその100回はやったであろう作業を止め、カップに添えられた小さなスプーンでグルグルとそれをかき混ぜていく。

砂糖こくと如きで飲み物の色は変色しないはずだが、その上品でお洒落、

尚且つ透明の赤茶のそれは、人の顔から生気が失っていくようにその色素を失い、透明から『半』透明へとその密度を増す。

これは既に『お茶』という種類にも含まれない。

ただの『糖分』だ。

これを飲んで恐らく平常な奴はいないだろう。

一滴飲んだだけで角砂糖一個分の甘さが口の中に広まる。

無論、『一口』なんて甘い考えで飲むと即死である。

だが、そこらへんにある『毒』よりも恐ろしい飲み物を口の中へ運ぼうと考える者がいる。

取つてを無視して、不器用にもその反対側の取つても何も付いていない場所をジュースを飲む勢いで掴み、唇へと運ぶ。

掴む左手と下唇がカップを支え、その『猛毒』を口の中へゆつくり流し込み、2口ほど飲んだところでホツとため息を漏らす。その表情は、『もうこんなに幸せなんだから、死んでもいいや』とでも語っていると思うほどに和らいでいた。

——と、勇人が長い実況解説をしたところで、

「それで……、何から話してほしい？」

猛毒を飲んでも平常でいられる唯一の地球上生命体(?)こと、神守裕が無表情で問う。

「とりあえず順序よくいこう……。えつと……、今更だけどお前は誰だ？」

もちろん、この神守裕が守護霊と呼ばれる『ガーディアン』ぐらい知っている。ただ、詳しい情報を求めると同時に、その目的等を説明するための引き金として聞いてみる。

「神守裕。所属は神道。かんながらのみち 又は神道とも言う。基本的には日本に在しているけど、日本は多神教だから、英国とかに居る時もあるぞ。イギリス 徴は神獣。しんごう 多少の霊術は扱えられるけど、やっぱり得意なのは、偽神化。しんか ……あ、わかると思うけど、職業は守護霊だ。ガーディアン 契約主は言うまでもなく『お前』。目的は、悪霊による殺人的襲撃からお前に助言及び守護、補助するのが俺の役目だ」

何を言っているのかさっぱりわからない。

勇人が聞きたい情報はほぼ無に等しく、目的の部分は大幅に短縮された上に、難しい日本語に変換されていたため、今の話では名前と守護霊を改めて理解した程度。

とりあえず、これ以上追求しても何も出てきそうにないので、幼稚園に話すかのように、

「えっと……、素朴な疑問なんだが、なんでそんな難しい言葉を知っているのに、泥棒は知らないのかな？」

「そんなの簡単だ。俺が住んでる霊界にあるものは知ってる。が、ないものは知らないのは当然だろ？俺から言わせてもらえば、フアントムは知ってるのに、ガーディアンを知らないのがおかしいと思うんだが……」

なるほどっ、と裕の説明に納得。

つまり霊界と呼ばれる場所には泥棒などいないということだ。

「はあ……。なんだろう——疲れる」

魂が抜ける勢いでため息を吐きながらベットに後ろから倒れこむ。「お前の考えてることはわかる。——どうして悪霊が俺を狙うか……」

「……」

勇人はため息を重ねて、

「わかってるだったら説明しろよ……」

裕の表情がやや陰しくなる。——さっきのように。

「——それは俺も知らん」

「ッ!？」

表情のわりにはふざけたことを言う。

当然、

「——な、なんだよそれっ!? それをわかったうえで俺を守護してるんじゃないのかよ？」

勇人がツツコミを入れたのにも関わらず、裕はその表情を崩すと

ころか、その険しさを増す。

「どういうわけかここ最近、森羅^{じんら}に悪霊が大量に発生しているんだが、その悪霊がハヤトを欲しがっているらしい。それで――」

「はあ？ 俺を欲しがるってどういう状況？」

「詳しく言い直せば、『ハヤトの身体に憑依したい霊がたくさんいる』ってこと」

「なっ……。だ、だからどうして俺なんだ？」

「それは上が調査しているところだけど……。どうやらハヤトにはなんらかの特別な能力か、体質があるらしい」

「お、俺は今まで生きてきて、勝手に物が燃えたとか、突如瞬間移動ができるようになったとかいうファンタジー要素は体験したことないんだぞ！？ しかも、それは今まで『レベル1』だったことが証明してるっ」

「だが、今はレベル3なんだろう？」

「ッ！……」

勇人はそのことを裕に言った覚えもないし、霊界に存在しないものがわからないのなら、この森羅のシステムをわかるはずがない。

だが、よく考えてみれば裕は勇人だけの心が読める。レベル3と知っているのはこのせいだろう、としばらく考えて、

「そ、そうだが……。それはお前のせいだろ？ 編集長も言ってたけど、霊を見ると脳がそれに反応して覚醒するってっ……」

「じゃあ、最初から霊^{オレ}が見えなかったどうだ？」

勇人は瞬時に裕が言いたいことを理解した。

つまり、勇人が元々レベルが『1』なら、霊という存在を見る以前に、それを見ることはできないのである。脳はその時点で『幽霊』という存在を拒否している。つまり視覚がそれを捉えても、脳は霊を存在しないことになっている設定なので、その情報は自動で消去されてしまう。

「そ、それは……」勇人はしばらく考え、裕の言ったことを思い出した。「お前、言ってただろ。レベル1にもお前が見えるのは『実体』^{サプス}があるからだ——って」

裕は軽く笑って、

「確かにそうだ。だが、俺は最初に確認した。『お前の名前は森羅勇人か？』と」

「そ、それがどうかしたか……？」

動揺が隠せない。

本当は気づいているくせに、その事実を受け止めたくないために気づかないふりをする。

その事実を知ったときのショックが大きくなるだけだというのに……。

「俺は守護霊だ。だけど、その契約主の顔も住所も知らない。当然、この森羅という場所の部屋部屋を探した。そしてくたびれて休んだ場所がお前の部屋のロフト。まあ、偶然というやつだな。そして『お前から俺に話をかけた。』この時俺はサブスタンスの霊術を使っただけでなかったぞ？ 使っていて、もしそこがハヤトの家じゃなかったら厄介だからな」

結論、

『勇人レベル1にも関わらず「力」を持っていた』

無論、そんな例外は一例たりとも存在しない。

刀を持ったレベル1。魔法を使うレベル1。超能力を使うレベル1。

——そんな例外はない。

絶対に。

なぜならそれらすべてが『非日常』だからだ。

刀を持つ——普通では法律がそれを非日常にしているし、魔法は存在しない2次元の世界だと知っている。超能力も同じ。だが、そ

れが『有り得る』と理解したとき、脳は刺激を受けて覚醒する。それらと関係ないレベル1が力を持つはずがない。例えば脳があるきっかけで刺激を受けたとしても、その時点でレベルは上がり、最低でもレベル1ではない。

それ以前に、^{まれ}勇人のようにレベルが上がるなどということ自体が稀。

生まれたときからのレベルと死ぬまでのレベルは変わらないというのがほとんど。

例えば、凄く絵の上手い画家が絵を描いているのを見たとする。すると見ていた自分は絵が上手くなるだろうか。その絵自体に興味があれば別だが、何の興味もないことを眺めて、絵を描いてみたところでその人のように描けるわけではない。それはこの森羅でも一緒。

手から炎を出すところを見たところで、魔法陣を見たところで、刀で斬るのを見たところで、興味がなければただそういうことができるんだあ……という情報が入るだけ。

つまり、どれだけ周りに超能力者や魔法使いや戦士が居ても、興味を持って、それに関する努力をしなければならぬ、ということである。

レベル1とはそういうことに興味が無い人のことを言うのである。「まあ、レベル3なのは、俺を見たせいではある。だが、元々その力を持っていたのは事実だ」

勇人は唇を動かそうとはしない。

そんな事実、聞きたくなくても、自然と聴覚が裕の言葉言葉一つずつキャッチしていく。

瞬間、裕の表情は完全に無表情と呼べるものではなくなった。

悩んでいるか、ためらっているか、どちらにせよ悪い予感がする表情には変わらない。

「……俺たち『^{ガイディア}守護霊』は……、普通はその主人から他の悪霊が憑依するのを防ぐために存在するんだが……、」裕は慎重に言葉を

選んでいく。

「俺はそれを含めて、『お前の見張り役』でもあるんだ……」

理解はできない。

理解はできないが……、何か嫌なものが胸の辺りを突き刺してくる。

見張り役——という言葉に疑問はない。

ただ、この胸の違和感を取り除いて欲しかったただけだった。だが裕はそれを悪化させるようにして話を続ける。

「世界が滅ぶ……とか言ったよな……。あれは、お前が万が一悪霊に憑依されたとき、ッ……その、だなっ……」

『俺が世界を壊す』

「ッ……」

知らずのうちにそう呟いていた。

勝手に思考を操られているような感覚。

胸の奥を何回も突き刺すようななんとも言えない痛み。

「俺が……、俺が世界を壊すの防ぐための見張り役……、なんだろう……」

問いかける、と言うにはあまりに不自然な口調。

だが裕は少し間を空けて、正直に頷く。

「ハヤトが……、悪霊に万が一呑まれたとき、俺が最終手段として止めるための見張りであり、そのための守護霊……」

裕だってこんなことを言いたくて言っているわけじゃない。

隠してもいずれわかることだし、これは守護霊に与えられた絶対命令。

どの道、この修羅場は通らなければならなかった。仕方がなかったのだ。

そのとき、勇人のなかで何かが破裂するような音が鳴った。

今までの不満と怒りが口の方へと流れていく。

「お前……、馬鹿だろ？ だったらなんで悪霊狩りなんてもんに行かなくちゃいけないーんだ！？ あのふざけたカメラで悪霊を集めてどうするつもりなんだよ！？ そんなリスクを犯してまでするものでもないはずだっ！ …………… もう、意味わかんねえ……………」

思わず勇人は泣きそうになる。

ただでさえ、こんな森羅という場所に軟禁されているのに、普通の生活を送りたいだけなのに、神は勇人を見捨てた。

いや、見捨てた以前に、神は霊を使って自分を不幸のどん底に突き落とそうとしている——というマイナスな思考が自然と頭の中を駆け巡る。

「それなんだが……、

「黙れっもういいっ！ どうせ俺はお前の今の話を信じちゃいない！ いつもそんな無表情で俺を馬鹿にしやがってっ」勢いよく立ち上がって裕を指差した勇人は、この部屋を去る最後の言葉として、

「——もう俺に付き纏うな」

もちろん勇人にはわかっていた。

裕にだって感情があることぐらい。

XVII 守護靈殺し（前書き）

戦闘に注意

XVII 守護靈殺し

街を走っていた。

勇人は少なくとも短気なほうではない。

さらに言えば、勇人は別に怒ってなどはない——と言えは嘘になるかもしれないが、少なくとも裕に対しての怒りではない。

今までに堪っていた不満などが裕の言葉を引き金に爆発しただけなのだ。

でも、それは怒りも含め、『不安』というものが大きく関わっている。

本当ならば、超能力や魔法、妖怪や悪霊なんかない、『普通』の空間で生活してみたかった。家族も普通で学校も普通で、普通に学校を卒業して、普通の職業に就いて、普通に結婚して、普通に老いばれて死ぬ。何の面白みのない生活してみたかった。

それだけ。

それだけだからこそ、この感情は重い。

この森羅に生まれた以上、ここから出ることはできない。

無論、それはこの島が世界を脅かすほどの強大な力を持っているからであり、そんなことが外に漏れてしまえば、世界が攻撃を仕掛けてくるか、又は利巧りうこうにも交渉して同盟を組むか。いずれにせよ、世界は滅びる。

この人口10万の森羅だからまだいいものの、人口60億という者全員が何らかの力に目覚めては、本当に『強い』『絶対権力』という方程式がでかかない。

そのならないためにも、この森羅周辺には防壁が張ってある。

当然、普通の防壁ではない。

森羅の姿を隠すと同時に、全生命体の出入りを防ぐ最強の結界という名が相応つたわしい最高の魔法防壁。

もちろん、勇人もそのことを知らないわけではない。

だけど、走りたかった。

このままこの島から出る勢いで真っ直ぐに、逃げたかった。

これ以上下手な方向に考えないように、神経を肉体集中させるようにして、全力で街を駆ける。

だけど、

裕の言うことを嘘だと思っではない。……いや、信じざる終えない。

勇人はあの時の裕の顔を思い出す。

あの辛い顔を。

会ったときから無表情でどことなくム力つく奴だったし、何を考えてるかわからないし、たった二日で勇人を不幸にしてくれたりしたけど、いざつてときに頼りになる——ってわけでもないかもしれないけど……、ただ、裕は純粹でとにかくいい奴だ。それだけはわかる——という思考が頭の中を駆け巡る。これでは走っている意味も空しいが。

ただ——気がかりのは、なぜ霊狩りという危険を負わせたのかという点だった。

自分でその話を切り捨てたのにこう考えるのも変だとは思うが、守護霊という名のだから、できるだけ守護の対象を危険な場所に行かせるわけではない。だとすれば、絶対的命令を受けたか、それ以外の理由があるはずだ。

「……あれ？」

——と、そうこう考えているうちに人気ひとけのない森にまで足を進めていた。

逃げたかったのは確かだが、無意識のうちにここまで来るとは……、予想外。

あげく、辺りを見回しているうちに自分がどこから来たのかということまでわからなくなるなり、自分の馬鹿さに呆れる。

と、これはマジでやばいと感じたところで、辺りを改めて見渡すが……、

「——どこを見ても同じ景色……」

うう……と、勇人は絶句する。

今更家我突然飛び出したことに後悔するが遅い。

その時だった。

四方八方同じ景色のはずの森に、何やら『異物』が存在するのを感じた。

それはパツと見ただけでは気がつかない。

ただその一箇所を漆黒に塗りつぶすように佇むその姿は、人……というよりは影。

服とも言いがたいその黒い布が体を被い、同色のフードが頭を隠している。

だが、何より奇妙なのは、『何も感じない』ことである。

そこに人が居れば、当然『気配』というものを感じるものだが、この目の前にいる影は、まったくそれを感じさせない。

まるでそこにはいないかのように。

「ッ……」

瞬間、それは後ろを向いた。

死神。

そう思わせるような髑髏ドクロという名の顔。振り向くまで気がつかなかった右手の大鎌。全身を被い尽す黒いローブ。

まさしく絵にでも描いたような死神だった。

それを見た勇人に襲い掛かったのは、『恐怖』と『不安』。

しかし、それは死神に対しての感情ではない。

改めて知る、自分の靈感ちから。本当に『死神』という『異物』が視覚——脳が捉えることができる力。それが自分に宿っているという恐怖と不安。

「……、お前——」

その死神は石像のように動かない。

それが逆に勇人を恐怖が徐々に呑み込んでいく。

「——森羅勇人。……ん、どこかで聞いた名だな」

自分の姿を見たというだけで、名前を当てられた感覚に襲われる。その死神の声は口から、というよりは、その死神自体から聞こえてくる。裕が言ったように魂の種類のの中にそういう声を出すという魂を使っているのかもしれない。

「——なんだ。『例の無の霊術師^{ノーセンス}』か……」

「……ノー、せんす……？」

知らずのうちに声に出していたその言葉。

その死神の言葉は本当に『無情』だった。裕のはまだ無表情という感情が聞いて取れる。が、この死神の言葉からは本当になにも感じないほどに無情だった。

するとその死神は勇人が自分を見えることがわかったように、

「ん？　なんだ、見えていたのか。——お前の守護霊から聞いてなかったのか？」

台詞を言い終えた約0、1秒後。死神は勇人の後ろに立っていた。

「『^{おとし}囷』ってことを」

その言葉からは『笑み』が感じて取れる。

人の不幸を喜ぶときのあの笑みが、勇人の頭に浮かび上がる。それと同時に勇人の体は凍りついた。

殺気。

その異様な空気だけで殺されそうなほどの濃密な殺気。最初に出会ったときの裕の殺気や亡霊の殺気などと比べ物にならないぐらいの圧が勇人にのしかかる。

だが、圧を掛けるのはその殺気だけではない。

『囷』という言葉が勇人を胸の奥を締め付ける。

「霊を引き寄せるその体質は、悪霊狩りにはもってこいだからな」

「……」

声が出ない。手が動かない。足が動かない。

その言葉一つ一つが勇人を串刺しにしていこうようだ。

「守護^{ガーディアン}霊は何をやってるんだろっうな？ お前に囷の役をやらせないなんてなあ？ ——いや」

死神はしばらく勇人を見透かすようにして、

「囷役にはしたようだな。……だが、出会った悪^{そむ}霊は1匹か……。

偶然か？ はたまた……、ガーディアンが命令に背^{そむ}いて悪^{そむ}霊を遠ざけた、か」

「ッ！」

霊の知識のない勇人でもわかった。

——裕は悪^{そむ}霊に勇人が吞まれないのを防ぐ守護^{ガーディアン}霊として、さらに吞みこまれたときのための最終手段としての見張り役の他に、上司的な奴から自分を悪^{そむ}霊の「餌」として扱えという命令もあった。そして裕はそれを実行した、俺を守りながら。囷としてではなく、それ以前に勇人に悪^{そむ}霊を見せないように何らかの「守り」を働いていた。最後に悪^{そむ}霊を見せたのは上司に怪しまれないように。

「お前には我々にとって危険な存在だ。利用する価値はある。だが、そのリスクも高い。よって『オレら』の上は、」

その時、喉の辺りに冷たい空気流れ込んできた。

「お前を『殺^けす』ことを判断した」

大鎌が今か今かと勇人の喉を斬り裂くのを待っている、その時だった。

「——おいっ」

突然後ろから言葉を浴びせられる。

その声は聞き覚えのある声——だったが、今までに聞いたことのないようなドスの利いた声だった。

「人の主^{ぬし}に手え出してんじゃねーぞっ」

裕は既に『怒』という感情のスイッチが入っていた。しかもそれはその上に『激』が入るほどのものだった。

「ふっ、随分と怒ってるなあ……、守護霊」

「黙れ——」

死神っ——と言うと同時に、その黒く染められた背中に手を勢よく当てようとした。が、

「魂の強制帰還ってやつか……？」

「ッ……」

そのときには既に、死神は最初に勇人が見つけた場所に立っていた。

「オレの仕事の邪魔をするな、ガーディアン」

「仕事だ？ テメエらが独断したことだろっ？ 亡霊^{ファントム}を召喚したの

もお前だなっ？」

「お前ら天人の判断が遅すぎるからいけねえんだっ。こんな危険人物、斬るしかないだろ？ それでも守護という『仕事』をするお前がオレは信じられないが、なっ！」

語尾と同時に勇人の目の前に瞬間移動して鎌を振り上げる。だが、瞬時にその間に割り入り、鎌に向けて魔法陣を発生させた——というわけではなく、ただ鎌を直でガードした。

「くっ……ッ」

「裕——」

声は出たが、一向に恐怖で体は言うことを利かない。

「この鎌の前では霊術は効かないということをよく覚えていたな……」

「ッ……」

「ッ……」

「痛みは感じてても、霊は不死身だ。だが、」

その瞬間、死神はその鎌を思いつき振り払う。

その裕の腕を削^{けず}るように……。

「あゝあゝ ああっ……ッ！」

それは勇人の白い制服、死神の漆黒のローブを赤く染めた。
その衝撃に声を失う。腰が落ち、その場に座り込む。さつきまで動かなかった身体はぶるぶると激しく震え始める。まさに戦慄（せんりつ）というやつだった。

「——『魂（こゝろ）を削（そ）ぎ取る』この死（し）の大鎌（ソウルキラー）の前では無意味だな」

裕のその右腕の肩から下は垂（た）らつと生気を失い、動かなくなっていた。

だが裕はその場に倒れる素振りすら見せず、況してや痛みを堪えて立っていた。

勇人を守護するように。

「そこをどけっ、ガーディアン。オレは本当の守護霊（しごみ）殺しになるつもりはない」

しかし裕こう言った。息を乱しながら、

「……、俺は、ただ……ハヤトを守護するだけだっ……」

この言葉で、
たったそれだけの言葉で、今までの勇人が感じていた恐怖や不安が吹き飛んだ。

自分の力から逃げるのではなく、それを受け止めて戦おうと思っただのである。

それは裕が守護霊としての役目を最後まで果たそうとしたのを見て思ったことだった。こんな目に遭っても、遭うと知っていてもそれと戦って自分の役目——勇人を守護するという役目を果たそうというその光景にまさしく心を打たれたのだ。

だが、

それは無残にも一瞬にして消え去ってしまう。
赤い軌跡が裕の胸の辺りから死神に向かって放物線を描くように

して進んでいく。

その先には大鎌。

魂を削ぎ取る大鎌の刃先に付いた赤い雫が地面に吸い込まれていた。
った。

『魂を抜かれれば「死ぬ」のと一緒になんだぞ?』

あのときのどうでもいい会話が、覚えてもいなかった会話が、鮮明に勇人の頭の中を満たす。

あの言葉が頭から離れない。

裕は、

裕は死神によって魂を抜かれた。

それは、

裕の死を意味する。

それなのに、裕は一向に倒れて来ようとはしない。

今も尚、^{なお}勇人を守るようにして立っている。

(もういいっ! …… お前は……、死んでも俺を苦しめる気かつ) ……。

『霊が死ぬ』なんて変な話だ。

でも勇人に耐えられなかった。

自分のせいで、『人』が死ぬなんて。

自分の弱さで、『人』が死ぬなんて。

その自分のせいで死んだのに、尚も自分を守ろうとするその後ろ姿が見ていられなかった。

その思いを理解したのか、裕はしばらくしてやっと勇人の元へ倒れてくる。

勇人は受け止めてゆっくり地面に降ろした。
冷たい。

青白い肌。

赤く染まった制服。

それを見ると、ますます自分を責めたくなくて仕方がなかった。
と、

勇人の頭上に小さな灰色の魂^{たま}が寄ってきた。

これがどこから現れたかはわからない。

そして、勇人の『中』へと入っていった。

瞬間、勇人の一切の感情、思考、意思が消え去っていった。

XVII 無（前書き）

戦闘に注意

XVIIII 無

「自分をも守護できないとは、守護霊として失格だな」
「……」

動かない。

「次は、お前だっ」

死神は嫌味つたらしく、大鎌の刃先に垂れた、勇人と死神にしか見えない裕の魂それを口へと運ぶ。だが、

それでも動かない。

「人間の魂は、オレらと違って一つに繋がっている……。身体はどこかに刃先が掠かすっただけで、『死ぬ』ぞ？」
そう言いながらも刃先を勇人に向ける。

でも絶対に動こうとはしない。

死神は鼻で笑い、

「死ぬっ」

ソウルキラー
死の大鎌が勇人を頭上を襲う。が、裕と同じように、腕でその攻撃を防ぐ。

「言っただけだぞ？ 守護霊とは違い、お前ら人間は身体はどこかに刃先が当たっただけで死ぬと、」

そういう死神は笑っていた（のだと思う）。

当然、勝利の笑みだ。

勇人がその大鎌に傷を付けられた時点で死んだのと同じ。

あとは斬り払うだけ。魂を剥ぐように。

「任務完了」

——そう言つて、勇人の魂ごと腕を切り裂いた。
当然、勇人はもうただの人形。

魂のない。空っぽの人形。

青白い魂は刃先に引つ張られて抜けた、

——はずだった。

「っ!？」

その大鎌に付いていたの赤い血だけ。魂などと呼ばれる代物は、
ない。

「——なっ! ……一体、どうなって……」

「——美味しかったか」

その時だった。

勇人が始めて死神に対して言葉を発した。だがその言葉は『無情』。
死神並み、或いはそれ以上の無情な声だった。

死神に襲い掛かったのは『恐怖』でも『疑問』でもなく、『戸惑い』。

突然の言葉に数歩後ろへ下がる。

「——魂は、美味しかったか」

死神はここでやっと理解する。自分が魂を食ったことについての
感想を求めていることに。

「……。ああ、美味かったぞ」

それを知つて死神の声から戸惑いがなくなつたところか、その声
からは余裕が感じられた。が、

「そうか」

と、瞬時に死神の前に移動した。
もちろん、何の力も持たない勇人がそんなことをできるはずがない。

『できるはずない』からこそ、死神はイライラする。
「なっ！ こ、こいつ……。人間如きが生意気なっ」
大鎌を円を描くようにして横に振り回す。

その刃先は勇人の左腕を貫通して、脇腹に刺さる。
「ふんっ。これでホントに終わりだ！」

と、その刃先を勇人の身体から抜き取る。だが、
魂は姿を現さない。

「ありえない！ こ、こいつ……。まさかっ……。！」
死神にとつと襲い掛かった『恐怖』。

魂を削ぎ取るこの『大鎌』が、魂を抜けないということは絶対にない。だとすれば、死神にとって最悪の人間ということ結論付ける。

魂が無い。

瞬間、血で塗られた右腕の拳が死神の顔面を直撃する。
死神は一回転して地面に叩きつけられる。

ビキッ。

そのとき、死神の髑髏顔にひびが入った。
欠けたその仮面から覗く青い目。

だが、勇人はこの死神の中身が人間だろうが、幽霊だろうが、神様
だろうがどうでもいい。

ただ『壊したい』だけ。

死神の方に足を進める。

「——なあ？　死神の魂って奴はどんな味がするんだあ？」

無論、それは勇人の言葉ではなかった。勇人の中にいる何かが言葉を発しているように感じる。

その瞬間、仮面から覗く青い瞳は恐怖で満ちていた。

勇人の血が流れるその右手が死神の顔をがっちりと掴む。同時に徐々に仮面が壊れていく。

「——俺が味見してやろうか？」

その目には生氣などない。

人形のようなその目に、悪魔のように笑う口はもう『勇人』ではなかった。

「や、やめろ！」

悪魔はその言葉を聞こえないようにして、赤い手を死神の口の中に入れ、

瞬間、

常人には聞こえない呻き声うめきこゑが森中に響き渡った。

「はあ！！؟؟　死なないとはどういうことだっ！？」

少年が近所迷惑ではないかと思うほどの大声を上げる。『近所』とは、少年が今いる病室の隣のことである。一応個室ではあるが、そんな大声を出されては、地下にある監禁病室に連れて行かれそう

な勢いだ。

翌朝。

両腕に包帯を巻いた見る限り不機嫌な少年——『勇者』はそこにいた。

生きている。

どういうわけか、気が付くとこの病室にいた。

彼自身、裕が自分に倒れこむところまでしか覚えてないらしいのだが、あの死神を倒したのは勇者なのである。

……『倒した』というよりは、『封印した』と言ったほうが正しいかもしれない。

まあともかく、勇者も生きていたが、彼もまた生きていた（という表現もおかしいが……）。

「そうだあ。俺はもと生きてないわけだし、魂が抜ければ魂を呼び戻せばいいことだ」

裕は呆れながら言った。

彼の斬られた右腕には包帯どころか、傷跡すら残ってはいなかった。上半身の方は制服でわからないが、どうやらこの分ではそれも治っているらしい。

「——まあそれも、お前が死神を倒さなきゃ、それも出来なかったんだけどなっ」

裕の口角がややつり上がる。

だが、その笑みを勇者は素直に喜べなかった。

自分は本当に死神を倒したのだろうか。なんの力も持たない自分が、本当に死神を倒したのだろうか。

記憶のない勇者にはそんな自分が凄いことをしたのが信じられなかった。

（まあ、裕を助けられたのなら良かったけど……）

そんなことを考えたところでどうにかなるという話でもないので

素早く話題を変える。

「あつ、そういえば、よくあんなカッコいい台詞が言えたよな？」
それは当然嫌味であり、『よくあんな気障きざんな台詞が言えるよな？』と遠まわしに言っているのであつた。

無論、その言葉とは勇人の心を動かした、『俺はただ勇人を守護するだけだ』である。

それを聞いて裕は顔を赤らめて、

「い、いや、なんと言うか……。あの時はムキになっていたと言
うか……」

「お前、徐々に無感情キャラを崩してきてるだろ？」

「そんなことはない」

「またまた？、そんないきなり無表情に答えたって、この森羅勇
人にはお見通しだぞ？」

「そんなことはない」

「だいたい、話題によって感情のスイッチが入れ替わるのはどうか
と思うのだが……？」

「そんなことはない！」

「カレーは怒、おやつは嬉、猫は楽、死神は激怒。喜激怒楽ってや
つだな。ははっはっ」

「だからそんなことはないと言ってるだろっ！！」

フツギヤアアアアアアアアアッ！

勇人の入院生活は1週間引き伸ばされた。

XVII 無（後書き）

第1部は完結です♪ 読んでくれた方本当にありがとうございます。さて次回からは、いたらんSS的なことを挟んで、第2部に入っていきたいと考えています。

それで一つ注意とお願いがあります。

今回もそうなんですが、残酷な描写及び性的な描写を入れる場合がある《予定》です。しかしながら、最初のところに警告するほどのものでもありません。小学生にわからない程度であり、わかる人ならわかる程度で描きます（性的に関しては）。残酷な描写は作者が独断で判断し今回のように警告をとりあえずいたしますので、その警告がどれだけ『長い』のかにご注目いただければ、そのグロさのレベルがわかると思います……、はい。

ごめんなさい。もう少し話は続きます。

どうでもいいのですが、今日をもって作者は高校生になりました！なので、更新スピードが速くなるか遅くなるかはわかりませんが、今までより若干変化するのでご了承ください……。それと……、

PVが3000突破しました！！！！

ありがとうございます、ホントに。

だけど、感想ください……。お願いします。励みになるので、よろしく願います。

長々となりますが、あと少しの辛抱を……

入学の日に合わせて、最後あたりは急いで書きました。なので誤字脱字や表現不足があるかと思いますが、それは感想も含めてご報告していただけると嬉しいです。

5 / 5 更新 この『SINRA』は休載8月まで休載することになりました；；

思った以上に高校生活が忙しいので更新が週に1……月2回……できるかどうかぐらいで、夏休みまで後回しにして一気に更新したいと考えています。それまでの間は、新連載でもしようかなあ……とか考えてみたり^^；

でも更新速度は良くても週1が基本になることは確かかと……

（新連載の方が人気だったらすっちをメインにしてみましたり……Σ（A₁）；

どちらにしても、今後もよろしくお願いしますm（――）

m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4584g/>

SINRA

2010年10月9日11時43分発行